西洋古典叢書がわかる リターンズ Lite

西洋古典への誘い

付 補遺

- 西洋古典哲学案内
- 古代ギリシア・ローマの歴史書
- ギリシア文学の流れ
- ラテン文学総説

西洋古典の系譜

関連地図

目 次

西洋古典への誘い

西洋古代哲学案内 …… 内山 勝利 2

補遺 日本語訳を中心とした古代哲学案内 …… 國方 栄二 21

古代ギリシア・ローマ時代の歴史書 …… 南川 高志 27

補遺 ますます進む古代ギリシア・ローマ史史料の翻訳 …… 南川 高志 54

ギリシア文学の流れ …… 中務 哲郎 62

補遺 邦訳と参考書 …… 中務 哲郎 74

ラテン文学総説 …… 高橋 宏幸 81

作家名、作品名表記の補正 …… 高橋 宏幸 87

西洋古典の系譜 …… 88

関連地図 …… 93

編集の辞 創刊～第Ⅳ期 …… 98

漫　　画 …… 107

「西洋古典への誘い」は、2017年発行「西洋古典叢書がわかるリターンズ」に掲載の内容をもとに、2023年、新たに補遺・補正を加えた。

西洋古典への誘い

西洋古代哲学案内

古代ギリシア・ローマと一口に言っても、その歴史は思いのほか長いものだ。哲学についてみても、その始まり（前6世紀初頭）から古代世界の終焉（後6世紀初頭）まで、およそ1100年間にわたっている。そのうちでも、ソクラテス、プラトン、アリストテレスが相次いでアテナイで活動した時代、つまり前5世紀半ばから前4世紀後半にかけての百数十年間が最も重要な時期で、彼らの存在は、一般にも広く知られていよう。

それに先行する百数十年は、「初期」ギリシア哲学（あるいは「ソクラテス以前の」哲学）と呼ばれるように、アテナイ哲学のさきがけをなすとともに、それ自体として独特の魅力をもった哲学的活動がおこなわれた。他方、アリストテレスの死（前322）をもって、ギリシア哲学の最も創造性豊かな時代は終わる。これと同時期に、政治的にもヘレニズム体制への転換が起こり、ギリシア世界全体が大きく変貌した（ギリシアとオリエントを席巻したアレクサンドロス大王が没したのは、アリストテレスの死の前年であった）。哲学思想の上では折衷と混沌とドグマの時代へと移っていく。ヘレニズム期は、本来のギリシア思想が地中海周辺各地の伝統と接触融合しながら、変容していく過程でもある。時間的には最も大きな部分を占めているこの間を二つに分けて、主としてアレクサンドロス大王が征服したア

ジア・エジプト方面にギリシア的なものが進展していった時期（前4世紀末―前1世紀末）を固有の意味でのヘレニズム時代、あるいは、この時期アテナイとともに文化的中心となった都市の名をとってアレクサンドリア時代と呼び、それに対してローマが強大な国家となって、前1世紀末にヘレニズム世界を統一支配してのちの数世紀をグレコ＝ローマン時代という風に呼び分けることもおこなわれる。

このように、古代哲学史は、本来のギリシア思想の創造性が花開いた古典期と、それが地中海世界全域に広がってさまざまな変容を遂げたヘレニズム期のそれぞれが、さらに二分されて、その全体はほぼ四つの時期に区分されるであろう。以下、その順序に従いながら、大きな思想の流れと主な著作をたどっていくことにしたい。

古典期（I） 初期ギリシア哲学　哲学は、小アジアのミレトスの人タレス（前6世紀前半）に始まる。さらに言えば、彼が予告したと伝えられる日食の起こった前585年をもって、哲学の始まりの目安とするのが通例である。世界を新たな目で捉えようとする姿勢がきわめて鮮明に示されたものとして、哲学の誕生を告げるのにふさわしい出来事だからであろう。彼は「万物は水から成る」と考えたと言われている。もっとも、タレスは何らの著作も残さなかったから、すべては言い伝えにすぎないが、この宇宙世界のすべての事象は、その内にある自律的な原理に支えられて一つのシステムをなしている、というまったく新しい考えに立って世界を眺めることを彼は始めたのである。そうした仕方で世界を「知る」ことは、いわば一つの人間的可能性の「発見」であった。タレスの「発見」は周辺に多くの共鳴者を見いだすことになり、アナクシマンドロス（前

570 頃）やアナクシメネス（前 547 頃）らが、やはりミレトスにおいて、彼の活動を継承発展させた。彼らはともに、「世界はどのようにして成り立ち、現にどのようであるか」について、系統立った仕方で記述した著作をしている。そして、彼らの著作を踏襲するかたちで、その後ほぼ 200 年にわたって、多数の人たちが「宇宙論」を骨格とする哲学的思索を展開し、それを著作にまとめあげていった。

クセノパネス（前 570 頃―470 頃）、ヘラクレイトス（前 500 頃）などが、ミレトス派につづく。ピュタゴラス（前 570 頃―510 頃か）もミレトス派の影響下にあるが、彼は深遠な宗教精神の持ち主でもあって、両者を結合しつつ、哲学と人生との関係にきわめて重大な意味をもたらした（ただし彼は著作はしなかった）。南イタリアのエレアで活動したパルメニデス（前 480 頃）は「論理」の重要性を強調して、その後の哲学にとりわけ大きな影響を与えた。ゼノン（前 450 頃）、メリッソス（前 440 頃）は彼の弟子である。エンペドクレス（前 450 頃）やアナクサゴラス（前 460 頃）は、そのエレア派の強力な「論理」に鍛えられつつ、それに対抗しながら、より整合的な宇宙原理を考察した。この時代のきわめて濃密な議論展開の中から成立した大きな成果の一つが、レウキッポス（前 450 頃）とデモクリトス（前 420 頃）によって提唱された「原子論（アトミズム）」である。

この時代に活動した哲学者はほかにも多数いる。しかし、きわめて残念なことに、彼らの著作そのものは、その後の歴史的経過の中で完全に失われてしまった。初期の哲学を知るための素材としては、おおむねヘレニズム時代の著作家たちが、ペリパトス派のテオプラストスの編纂した『自然学説誌』に直接間接に依拠しつつ、彼らの著作の中でごく断片的に引用している箇所がわずかに今日まで

伝わっているにすぎない。それらを膨大な古典文献の中からたんねんに拾い集め、さらに初期ギリシア哲学者たちを知るための関係資料を合わせて編纂したものが、ヘルマン・ディールスとヴァルター・クランツの手になる『ソクラテス以前哲学者断片集』である。この分野については、本書（それ自体はむろん現代の著作だが）によってようやく窺い知ることができる。また、それと並ぶべき網羅的な断片集がA・ラクスとG・W・モーストらによって最近一挙に刊行された（*Early Greek Philosophy*, Vols. I–IX, 2016, Loeb Classical Library）。精選された新資料も十全に収められており、これが新たな標準版として定着することになるのではないかと期待される。

固有の意味での哲学史には属さないが、前5―4世紀にかけての医学思想の動向にも注目しなければならない。特にコスのヒッポクラテス（前5世紀半ば）によって医術の自立性と医の倫理が確立されたことは、よく知られていよう。古来『ヒッポクラテス全集』として伝えられてきた70篇ほどの医学論考は、ヒッポクラテス派のみならず同時代の諸医学派の著作を集成したものである。

古典期(2)　アテナイの全盛時代　当時の文化全般がそうであったように、初期ギリシア哲学の主な舞台は、小アジアのイオニア地方や南イタリアなど、ギリシア本土を離れた地域であった。アテナイが全ギリシアに名を馳せるのは、二度のペルシア戦争（前490、480）という大きな試練を、きわどいところで乗り切ってからのことである。戦後、まず軍事・経済面において国力が急速に高まると、全ギリシアから多数の哲学者や知識人たちがアテナイに集まるようになり、前5世紀半ば過ぎから、急速にギリシア文化の中心地とし

ての地位を獲得する。

いまや「全ギリシアの知恵の殿堂」と呼ばれるようになったアテナイで、新しい教育活動を始めたのが、ソフィストたちである。彼らは、もっぱら政治の場で有用な弁論術を教えることに力を入れたが、いわば人材養成のための高等教育の理念を確立し、それを実践した意義は大きい。プロタゴラス（前 490 頃―420 頃）はその創始者にして第一人者の地位を占め、弁論術の大家ゴルギアス（前 500／480 頃、390／75 頃）、博識万能を誇るヒッピアス（前 5 世紀後半）、細かな語義の峻別で名をなしたプロディコス（前 5 世紀末―前 4 世紀初め）などが、とりわけ著名である。彼らはいずれもアテナイと関係の深い国々の出身者であったが、その影響を受けて過激な開明思想を唱えたアテナイの知識人、たとえばクリティアス（前 460 頃―403）やアンティポン（前 5 世紀後半）なども、しばしばソフィストと呼ばれている。彼らの多くが、自らの教育理念やその方法ないしマニュアルを著作として公刊したが、初期哲学者たちの場合と同じように、作品はほぼすべて失われ、今日では後代の著作家による引用を通じてわずかに知られるにすぎない。それらの著作断片も H・ディールスと W・クランツの編纂した『ソクラテス以前哲学者断片集』および A・ラクスと G・W・モーストらの『初期ギリシア哲学』に収められている。

前 5 世紀後半のソフィスト的な風潮に抗して、ほんとうの意味でのすぐれた生き方と、それを実現するための人間形成はいかにあるべきかを深く問いなおしたのが、ソクラテス（前 470―399）であった。彼は、人々との対話を通じて、その答えを生涯求めつづけ、その探究活動を「愛知（ピロソピアー）」すなわち「哲学」と呼んだ。彼自

身は何一つ著作をしなかったが、彼に魅せられ彼の周囲に集まった人たちによって、ソクラテスを主人公とする作品が書きはじめられた。中でも、プラトン（前 427―347）の「対話篇」はとりわけすぐれたものであるが、クセノポン（前 427 頃―354 頃）の『ソクラテス言行録』（『ソクラテスの思い出』の邦題でも知られる）をはじめとする幾篇かの「ソクラテス対話篇」（本叢書では『ソクラテス言行録』（1）および（2）として纏められるが、（2）は未刊）も、それと並んで重要である。ただし両者の伝えるソクラテス像には大きな開きがあり、実際に彼がいかなる人物であったのかについては、いまなお議論がつづいている。また、キュニコス派のアンティステネス（前 445 頃―336 頃）、快楽主義を唱えたキュレネ派のアリスティッポス（年代不詳、プラトンよりやや年長か）などは、「小ソクラテス派」と呼ばれるように、それぞれに彼の思想の一面を継承して独自の哲学を展開したが、彼らについては、ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』に述べられている以上のことは、ほとんど何も伝わっていない。

「ソクラテス的対話篇」の執筆を通じて、彼の精神をも最もよく継承し発展させていったのは、まぎれもなくプラトンであった。彼によって哲学は、一個の「学」として大成される。その著作は、古くから九つの「四部作集」に整理されて（それら 36 篇には若干の「偽作」の混入が疑われるものの）、古代の哲学者のうちでは最も完全なかたちで伝えられている。

今日では、主として文体上の変化および内容上の発展に従って、プラトンの全作品の執筆時期を初期・中期・後期に三分することもできるようになった。初期著作は、「ソクラテス的対話篇」とも言

われるように、生前のソクラテスの言行を鮮やかに伝えながら、その哲学的意義を浮かび上がらせたものである。『ソクラテスの弁明』『クリトン』『カルミデス』『リュシス』『ヒッピアス（大・小）』『プロタゴラス』など、比較的小篇が多いが、作品数の上ではおよそ20篇がこの時期のものである。『ゴルギアス』における哲学と弁論術の対決、『メノン』における想起説の導入を経て、中期著作の『饗宴』『パイドン』『国家』（全10巻）『パイドロス』では、プラトン哲学の中心をなすイデア論や魂不死説などが、比類のない哲学的憧憬の念をこめて情熱的に語られる。『パルメニデス』以降の後期著作においても、イデア論への確信は保持されるが、議論はむしろ理論的な基礎固めに向かい、したがって内容的にも高度な専門性と緻密な論理の展開が基調となる。『テアイテトス』『ソピステス』『ポリティコス（政治家）』の三部作、プラトン独自の宇宙論を論じた『ティマイオス』、アトランティス伝説が語られる『クリティアス』、快楽論を吟味しながら生の根拠を問いなおす『ピレボス』、そして最後の著作で、未完の草稿に終わったとも伝えられる『法律』（全12巻）および『エピノミス（法律後篇）』などが、ほぼこの順序で書かれたものと考えられている。このほか13通の「書簡」も残されており、中には「第七書簡」のように重要な内容を含むものもある。

北ギリシアの町スタゲイラに生まれたアリストテレス（前384―322）は、17歳のときプラトンの学園アカデメイアに入学し、師の没するまで、20年以上にわたって、そこに留まる。ついで小アジアやマケドニアを遍歴したのち、ふたたびアテナイに戻り、新たな学園をリュケイオンに開く。彼の学派は、のちにペリパトス派と呼ばれるようになる。両者の哲学は鋭い対立をはらんでいたとはいえ、

プラトン哲学はアリストテレス哲学の骨格にまで深く浸透しており、さまざまな局面にその影響を見てとることができる。

アリストテレスは、すでにアカデメイア在学中から著作を始めているが、それらプラトンの影響が色濃い「初期著作」はすべて失われ、やはりわずかな断片のみしか残されていない（今日では周到な『断片集』が編纂されている）。また、ディオゲネス・ラエルティオスなどによって伝えられている「著作目録」は膨大なものである。今日まで伝えられている「アリストテレス著作集」は、主として彼がリュケイオンの学園でおこなった講義の草稿や筆記ノートなどを整理して一定の纏まりをつけたものと見られている。したがって、のちの「編纂者」による加筆訂正の可能性を含めて、文章上の不整合や未整理なところも少なくないが、かえって彼の思考のあとが鮮明にとどめられていて、ある意味で、それが独特の魅力ともなっている。

「万学の祖」アリストテレスの著作はきわめて広範囲にわたり、それらの全体は一つの「体系」を目指していたことが、十分にうかがわれる。伝統的な著作配列は、論理学書（『カテゴリアイ（範疇論）』『命題論』『分析論（前書・後書）』など）に始まり、次に最も大きな部分を占める自然学的諸学に関する著作がつづく。『自然学』はその原理論にあたるもので、以下は天体の原理を論ずる『天について』、「月下の世界」の原理を論ずる『生成と消滅について』、大気圏現象を扱う『気象論』というように、対象領域に従って順序立てられている。『魂について』はいわば生物学原論で、それに『動物誌』『動物部分論』『動物進行論』など、アリストテレスが最も得意とする生物学的諸著作がつづく。植物学などについては、まとまった著作はないが、『小品集』や『問題集』には、きわめて広範な問題が

取り扱われている。それらにつづくのが『形而上学』である。この書はいくつかの草稿群としてあったものが、後代になってからこの表題のもとにまとめられたものと伝えられ、きわめて複雑な構成をなしているが、自然的事象のすべてにわたる根本原理を、神にまで及ぶ視野の中で基礎づけた著作として、最も重要な位置を占めている。以上の「理論的諸学」に対して、そのあとには「実践的諸学」と「制作的諸学」が配される。前者としては、まず『ニコマコス倫理学』『大道徳学』『エウデモス倫理学』の「三大倫理学書」があり（ただし『大道徳学』は偽書）、家政（経済）を論じた『経済学』と、国家支配のあり方についての『政治学』が、それにつづく一連の議論をなすものと位置づけられる。さらに、「制作」にかかわるものとして『弁論術』と『詩学』が「著作集」の最後に配されている。このほかに『アテナイ人の国制』がある。これは 19 世紀末にエジプトの古代遺跡からパピュロスのかたちで発見されたもので、歴史資料としても貴重視されている。

プラトンやアリストテレスが開設した学園は、彼らの死後も古代末期までほぼ途絶えることなく存続するが、ヘレニズム期には全般に振るわず、アカデメイア派では 2 代目学頭スペウシッポス（前 407 頃―339 頃）以降の人たちの著作は、わずかな断片のほかには、伝存していない。この事情は、前 3、2 世紀の「新アカデメイア派」と呼ばれる懐疑主義者たち、アルケシラオス（前 315 頃―240 頃）やカルネアデス（前 214 頃―129 頃）などについても、同様である。ペリパトス派は、アリストテレスの後継者テオプラストス（前 370 頃―285 頃）のもとで勢力を広げた。彼は師の遺稿の整備に努めるとともに、みずからも多数の著作をおこなった。今日まとまったかたち

で伝えられているものとして、軽妙な性格描写が斬新な『人さまざま（性格論）』のほか、『植物誌』『植物の諸原理について』がある。アリストテレスの著作と同名の『形而上学』は、師の学説への批判を含みながら、素描風なものにとどまっている。『感覚について』は、初期ギリシア哲学者からプラトンに至るまでの感覚論を概説整理したもので、重要な証言に満ちている。これは元来、アリストテレスの意向に従って編纂した『自然学説誌』の一部であったと見られる。全体は 16 ないし 18 巻の大著であったその『学説誌』は、ヘレニズム時代を通じていくつかの「要約本」が作られ、ギリシア哲学史の基本資料の役割を担うことになる。ただし、それも今日に伝わるのは、わずかな断片のみである。

ヘレニズム期（I） アレクサンドリア時代　アレクサンドロス大王によって、ギリシア全土とメソポタミア一帯に及ぶ西アジアおよびエジプトが統合されたあと、彼の武将たちの間で、激しい領土分割の係争がつづく。その中で最も大きな国家をなしたのが、エジプトを中心とするプトレマイオス王朝であった。その首都アレクサンドリアは、歴代王朝の庇護のもとで、アテナイをしのぐほどの文化的繁栄を誇った。

しかしこの時期においても、哲学については、依然アテナイが中心地であった。プラトン、アリストテレスの没後に名声を博したのは、キティオンのゼノン（前 335―263）が創建したストア派と、エピクロスが私庭に開いた学園であったし特に前者はこの後長く大きな勢力を形づくり、のちにローマ人の間でも盛行した。ゼノンのあとにも、クレアンテス（前 331―232）、クリュシッポス（前 280―207）

などを輩出した。彼ら、初期ストア派の人たちの膨大な著作も断片しか残されていないが、19 世紀にフォン・アルニムによって『初期ストア派断片集』としてまとめられている。また「中期ストア派」を代表するポセイドニオス（前 135―51）は、アリストテレスと並ぶ万能の大著作家であったが、作品はすべて逸失し、ただキケロやストラボンなどの引用・言及を通じて知られるだけである。L・エーデルスタインとI・G・キッドによって、網羅的な『ポセイドニオス断片集』が編纂・刊行されている。

デモクリトスのアトミズム（原子論）を継承発展させながら、ストア派に拮抗する道徳哲学を唱導したエピクロス（前 341―271）の場合も、300 巻にのぼる主要な著作はすべて失われたが、それらを要約した「書簡」3 通が、幸いにもディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』の中に収められている。さらに、箴言的な「主要教説」なるものも、かなりまとまったかたちで伝わっており、哲学的骨格はほぼ窺い知ることができる。また、あとで触れるように、彼の思想を祖述したグレコ＝ローマン時代のエピクロス派文書がいくつか伝存している。

他方、プトレマイオス王朝下のアレクサンドリアでは、哲学から分化した諸科学が盛行した。自然科学関係の著作としては、エウクレイデス（ユークリッド、前 3 世紀前半）の『原論』が最も著名である。本書は、ギリシア幾何学の集大成ともいうべきもので、彼に先行する時代のアカデメイアやピュタゴラス派の数学の水準の高さをよく示している。彼にはほかにも多数の著作があったが、すべて失われた。やや遅れてシチリア島で活動したアルキメデス（前 287―212 頃）は、すぐれた機械技師であるとともに、微積分に近い考え

方をも含む高度な数学的著作が多数あり、今日に伝わる論考も多い。また地動説で有名なサモスのアリスタルコスもほぼ同時期（前 301 頃―230 頃）の人で、『太陽と月の大きさについて』が伝存している。この時代のアレクサンドリアでは医学も盛行した。ヘロピロス（前 300 頃）とエラシストラトス（前 200 頃）が特に有名で、二人は解剖を積極的に進めることでこの分野に大きな進展をもたらした。彼らの著作も今日に伝わるものは何もないが、ヘロピロスおよびヘロピロス学派についてはフォン・シュターデンによる充実した著作断片集（*Herophilus: The Art of Medicine in Early Alexandria*）が編纂刊行されている。（この時代のアレクサンドリア学芸のその他の分野については「文学」の項を参照されたい。）

ヘレニズム期 (2)　グレコ＝ローマン時代　前 2 世紀頃からギリシア世界に進出していたローマ勢力は、前 30 年に女王クレオパトラの支配するプトレマイオス王朝を滅ぼすと、東地中海一帯からオリエントにかけての全域を完全に併呑した。またこの頃からローマはギリシアの学芸の吸収に努めるようになる。哲学・思想の分野でそれに最も貢献したのは、キケロ（前 106―43）である、彼はギリシアに遊学して、アカデメイアやストアの学園に学んだ。『アカデミカ』『トゥスクルム荘対談集』『善と悪の究極について』『神々の本性について』などは、当時のギリシア哲学の状況をよく伝えるとともに、資料的にも貴重な引用的証言を多数残している。

キケロと同時代のピロデモス（前 110 頃―50／45 頃）は東方の出身だが、ローマおよびヘルクラネウムで活動したエピクロス主義者で、『弁論術』や『敬虔について』をはじめ、哲学・神学から美学・論

理学などきわめて広範多岐にわたる著作がある。作品としての魅力はやや乏しいが、今後本格的に研究されるべき重要な思想家の一人である、同時代のエピクロス主義者にルクレティウス（前 94 頃―55 頃）がいる。謎と神秘につつまれた生涯のあとに残された唯一の著作『事物の本性について』は、エピクロス派のアトミズム的宇宙像を、長大な叙事詩体で書き綴ったもので、古代哲学全体を通じて最も深い魅力に満ちた作品の一つに数え上げることができる。

次の世紀に活動した（大）プリニウス（後 23―79）も、ギリシア文化の影響の申し子であろう。彼はローマの政治家・軍人であったが、自然研究への熱意から、有名なウェスウィウス（ヴェスヴィオ）火山の噴火の調査に赴いて没した。膨大な『博物誌』は実地調査と文献博捜にもとづく成果で、以後このスタイル自体が時代に即応した哲学思想の表明の形式として定着し、本書に依りながら同様の著作がくりかえし試みられていく。

この時代、ギリシアに生い立ってローマで活動したギリシア人も多い。プルタルコス（後 46 頃―120 以降）はアテナイで学んだのち、主として故郷のカイロネイアで過ごしたが、一時期はローマに赴いている。彼の著作は比較的多数伝えられている。最も知られるのは、ギリシアとローマの歴史上の人物約 50 人（現存するのは 22 組）を比較的に論じた『英雄伝（対比列伝）』であろう。ほかに、歴史・風俗から哲学・倫理思想までの幅広い論考を集めた『モラリア』がある。いずれも大冊にわたる。やや時代が下るが、これまでにも触れた『ギリシア哲学者列伝』で名高いディオゲネス・ラエルティオス（後 3 世紀初め）も、ローマ貴族の家庭にギリシア学芸の教師として仕えていたことが、その著作から分かっている。本書は、いわばさまざ

まな伝承を（虚実ない交ぜのまま）寄せ集めたもので、読んでおもしろいと同時に、すべてのギリシア哲学者たちを網羅したほとんど唯一の伝記として、大きな価値をもっている。

ローマ人に最も歓迎されたのはストア哲学の実践的な倫理思想であった。後1世紀から2世紀の帝政ローマに3人の哲人が相次いで登場する。セネカ（前4頃―後65）は政治家としても活躍し、特に皇帝ネロと確執で知られる（最後には、陰謀加担の嫌疑を受けて自殺）。平明に書かれた多数の哲学論考は、分野別に『自然研究』『道徳論集』『道徳書簡集』にまとめられている。エピクテトス（後55頃―135頃）は、解放奴隷の身で主としてローマで哲学を講じた。弟子のアリアノスが記述した『談論』および『要録（エンキリディオン）』があり、自己の尊重と内面的自由を説いて広く影響を与えた。皇帝マルクス・アウレリウス（121―180）もその一人で、学を好み、豊かなギリシア的教養を身につけていた。在位中はほとんど戦陣にありながら哲学的な手記を書きつづけ、それを『自省録』にまとめあげた。

帝政初期から最盛期にかけてのローマで最も盛行した学術の一つに、アレクサンドリアから移入された医学がある。古代医学の大成者ガレノス（130頃―200以降）は、小アジアのペルガモンに生まれたが、マルクス・アウレリウス治下のローマで活動し、皇帝とも親密な間柄にあった。彼の膨大な著作の多くは、当時のさまざまな医学派との激しい論争の中から生まれたものである（『自然の機能について』もその一つ）。著作は、今日に伝わるものだけでも、19世紀に編纂された標準版で1万頁分にものぼり、伝存量は他のいかなる古代著作家をも凌駕している。中世・近世に継承されたギリシア医学の

実質を占めていたのは、ヒッポクラテス以上にガレノスであったと言っていい。

彼の死と相前後して同じローマで活動を始めたセクストス・エンペイリコス（3世紀前半）も、名前のとおり経験派の医師であった。しかし彼はむしろ懐疑主義の哲学者として重きをなしている。『ピュロン主義哲学の概要』および『学者たちへの論駁』（『論理学者たちへの論駁』『自然学者たちへの論駁』『倫理学者たちへの論駁』を含む）は、この分野においてかけがえのないもので、後代への影響の大きさも（別の意味で）ガレノスに勝るとも劣らないものがある。なお、当時アレクサンドリア学芸の最盛期は過ぎ去っていたが、プトレマイオス・クラウディオス（2世紀）の天文学は、この時代の所産である。彼の『数理天文学体系（アルマゲスト）』などは、ガレノス医学と同様に、ギリシア科学の集大成と見なされ、長く影響を及ぼしつづけた。ちなみに、ローマ社会では占星術的な関心も旺盛であったから、通俗的な天文学書も盛行した。時代を遡るが、叙事詩体で著わされたマニリウス（後1世紀）の『天文誌（アストロノミカ）』もそうしたものの一つである。

プラトンおよびアリストテレスの哲学は長らく他学派の陰に追いやられがちであったが、紀元前後に新たな全集が編纂された頃から、ふたたび注目を浴びるようになる。プラトンについては、先に述べたプルタルコスの『プラトン哲学に関する諸問題』をはじめとする一連の論考（『モラリア』所収）や、アルキヌス（アルビノス、2世紀）の『プラトン哲学序説』などが相次いで書かれるようになる（それらは本叢書の『プラトン哲学入門』に纏められている）。アリストテレスの学園もアプロディシアスのアレクサンドロス（200頃）によって

再興される。彼の著わした注解書（『「形而上学」注解』など）は、難解なアリストテレス理解を大きく促進し、またこれ以降の研究の模範となった。

古代において最もラディカルなプラトン復興を推進したのは、むろんプロティノス（204／5―269／70）に始まる新プラトン主義である。この運動を担った哲学者たちの多くは、オリエント的な風土の中で生い立ち、新ピュタゴラス主義の名で呼ばれる濃厚なシンクレティズムの色彩を身にまとった人たちであった。プロティノスはおそらくエジプト人であり、彼がアレクサンドリアの思想的混沌を遍歴したのち、プラトニズムに覚醒した経過は、弟子のポルピュリオス（234頃―304頃）によるすぐれた伝記からも、容易に跡づけることができる、師の遺稿54篇を六つの『エンネアデス（九部作集）』に編纂したのも彼である。伝記においては、逐一の論考について正確な執筆年代順をも明記している。こうした意味で、古代の哲学者の中で最も恵まれた伝承事情にあるのは、まぎれもなくプロティノスであろう。彼の哲学の骨格をなす、「一なるもの」を頂点とする存在の階層的統一構造化は、深いプラトン理解を踏まえてその本質を捉えたものであるとともに、アレクサンドリアのピロン（紀元前後）や新ピュタゴラス派のヌメニオス（2世紀）などを範として、オリエントの神秘宗教とギリシア哲学の融合を図ったものでもあった。弟子のポルピュリオスは該博な思想家で、著作は多方面にわたる。古代の伝記の中では随一とされる『プロティノス伝』、ピュタゴラス派への傾斜を示す『ピュタゴラスの生涯』や『肉食の禁忌について』、ホメロスの詩句を論じた『ニンフたちの洞窟』、妻にあてた『マルケラへの書簡』などが残されている。また『「カテゴリアイ」序

説（イサゴーゲー）』『「カテゴリアイ」注解』は、あとで述べるボエティウスを通じて中世哲学にまで大きな影響を与えた。

プロティノスやポルピュリオスは主としてローマで活動したが、北辺民族との軋轢やキリスト教の伸長によって、この地はすでにギリシア文化と相いれなくなりつつあった。彼の死後その弟子たちは、拠点をギリシア本土や各自の出身地（主として小アジア各地）に移す。ポルピュリオスに学び、シリアで学園を開いたイアンブリコス（250頃―325頃）によって、新プラトン主義のオリエント的基調は、さらに明確化される。今日残っている著作には、『ピュタゴラス的生き方』『哲学への勧め（プロトレプティコス）』などのピュタゴラス派関連書、当時の宗教に関する資料として貴重な『密儀について』などがある。ただし、それらはなお彼の本姿を伝えるには足るまい。アテナイのアカデメイアで活動したプロクロス（412―484）は、新プラトン派最大の体系思想家で、大著『プラトン神学』、またエウクレイデスの幾何学を範として書かれた『神学綱要』は、完成された学派理論書としてスコラ哲学を先取りしているとも見られる。ほかにプラトンの『「ティマイオス」注解』『「パルメニデス」注解』などがあり、これらは精細だが比較的平明に論述されている。

ちなみに、プロクロスにやや先立って『「ティマイオス」注解』をラテン語で著わしたカルキディウス（4世紀後半）については、同書のほかには何も知られていないが、明らかに新プラトン派の影響（特にポルピュリオス）を受けている。また『哲学の慰め』で名高いボエティウス（480頃―524）にも、その影響は顕著である。この「最後のヘレニスト」は、プラトンとアリストテレスのラテン語全訳を志し、実際に完成されたのは後者の論理学関係書の訳と『「カテゴ

リアイ」注解』『「命題論」注解』およびポルピュリオスの『「カテゴリアイ」序説（イサゴーゲー）』の訳と注解のみであったが、中世ヨーロッパにおけるアリストテレス理解は、これらの著作が主要経路となった。

しかし、当時のオリエント的要素と、プラトンおよびアリストテレスとの融和を図ろうとした新プラトン主義には、さまざまな趨勢がある。アレクサンドリアを拠点としたイシドロス（5 世紀後半）やダマスキオス（6 世紀前半、最後のアカデメイア学頭で、『第一の原理について』『イシドロスの生涯』などの著作がある）は、プロクロスに全面対立した汎神論的統一理論を提唱している。新プラトン派の活動は、ほとんどその当初から、アジア各地に分散的に展開されていたが、529 年に皇帝ユスティニアヌスが異教（非キリスト教）的学芸活動の禁止令を発すると、ギリシア文化の主要拠点はさらに東方に移されていく。その最後に位置するのが、シンプリキオス（6 世紀前半）による精緻を極めたアリストテレス注解書である。伝存するものに『「カテゴリアイ」注解』『「自然学」注解』『「天について」注解』『「魂について」注解』などがある。これらは、アリストテレスへの最良の手引きであるとともに、初期ギリシア哲学者たちの著作やテオプラストス『自然学説誌』の資料的引用を多数含むことでも、重要視される。

また、アテナイよりも長く存続したアレクサンドリアの学園では、ピロポノス（490 頃―570 頃）が、ほぼ同時代に同様のアリストテレス注解書を著わした。『「カテゴリアイ」注解』『「分析論」注解』『「気象論」注解』『「生成と消滅について」注解』『「魂について」注解』などが伝存する。彼の立場はキリスト教に傾斜しており、多く

の点で意識的にシンプリキオスに対抗した解釈を提示している。やはりその頃アレクサンドリアで活動したオリュンピオドロス（6世紀）は新プラトン主義を堅持しながら、主としてプラトンへの注解書を著わした。『「アルキビアデス」注解』『「ゴルギアス」注解』『「パイドン」注解』などがある（『「ピレボス」注解』は、今日ではダマスキオスのものとされる）。

*

以上の概観は、スコープをもっぱら固有の意味での「古代ギリシア・ローマ」に限ることとした。ほかにも、特にヘレニズム時代にはユダヤ・キリスト教との接触・交流に伴って、その分野に重要な著作が多い。たとえばアレクサンドリアのピロン（前30頃―後45頃）、護教家のテルトゥリアヌス（160頃―220以降）、教父のヒッポリュトス（170頃―236頃）、エウセビオス（264頃―315）などは、本来、古代哲学史との関連においても欠かせぬ存在である。

内山 勝利

補遺　日本語訳を中心とした古代哲学案内

西洋古代哲学の概説は上掲の案内文（内山勝利）に譲るとして、ここでは日本語文献で古代哲学を簡単にたどってみよう。

通史として最も役に立つのは、内山勝利責任編集『哲学の歴史 1〜2』（中央公論新社、2007-08）であり、たいていの哲学者を網羅している。納富信留『ギリシア哲学史』（筑摩書房、2021）は古典期までを中心に述べているが、記述は詳細にわたり新しい解釈の試みもある。

古典期（1）　初期ギリシア哲学

ソクラテス以前の哲学者の断片は、ディールス／クランツの編になる『ソクラテス以前哲学者断片集』（通例 DK と略称して、出典を示すのが慣例になっている）に収録されており、同書の日本語訳（内山編、全 5 冊＋別冊、岩波書店、1996-98）が刊行されている。部分訳だが、廣川洋一『ソクラテス以前の哲学者』（講談社学術文庫、1997）は 1 冊にまとめられていて簡便である。ほかにも、日下部吉信編訳『初期ギリシア自然哲学者断片集』（全 3 巻、ちくま学芸文庫、2000-01）が出ている。なお、先の概説部分に言及されているように、最近ようやく新たな断片集が A・ラスク／G・モーストによって編纂刊行された（Loeb Classical Library, 2016）。

G・S・カークと J・E・レイヴンの共著（1957）に M・スコフィールドが補訂した『ソクラテス以前の哲学者たち【第 2 版】』(1983)は、この時代の哲学がもつさまざまな問題を網羅しておりきわめて有用であるが、内山勝利他による日本語訳（京都大学学術出版会、2006）が出ている。エンペドクレスに関しては、20 世紀にパピルス写本（ストラスブール・パピルス）も発見されており、部分的な情報にとどまるとはいえ、この哲学者の著作構成（したがって断片の配列順）についての新たな示唆がもたらされている。

古典期（2） アテナイの全盛時代

この時期で最も重要な哲学者はなんと言ってもプラトンとアリストテレスである。プラトンの全集にはいくつかあるが、『プラトン全集』（全 15 巻+別巻、岩波書店、1975-78）が完結した後は新しい全集は出ていない。個別の著作にはいくつかの翻訳が出ており、西洋古典叢書では、『ピレボス』（山田訳、2005）、『饗宴／パイドン』（朴訳、2007）、『エウテュデモス／クレイトポン』（朴訳、2014）、『エウテュプロン／ソクラテスの弁明／クリトン』（朴・西尾訳、2017）、『パイドロス』（脇條訳、2018）が出ている。初期・中期・後期著作で未収の著作が多数あり、新しい訳の刊行が予定されている。文庫では、昔は岩波文庫や新潮文庫に主要著作が収められていたが、近年では講談社学術文庫、光文社古典新訳文庫に新しい訳が出てきている。研究書に関してはあまりにも数が多いためここには記さないが、内山勝利編『プラトンを学ぶ人のために』（世界思想社、2014）の巻末に入手可能な文献が紹介されている。

また、プラトンに関しては古代後期にいくつもの註解書が書かれ

たが、その一冊としてラテン語で書かれたカルキディウス『プラトン『ティマイオス』註解』（土屋訳、2019）が叢書に収められている。

万学の祖であるアリストテレスについては、内山勝利・神崎繁・中畑正志編による新版『アリストテレス全集』（全 20 巻、岩波書店、2013～）が、旧版の出隆監修・山本光雄編『アリストテレス全集』（全 17 巻、岩波書店、1968-73）に代わるものとして刊行されており、まもなく完結の予定である。西洋古典叢書には『天について』（池田訳、1997）、『魂について』（中畑訳、2001）、『政治学』（牛田訳、2001）、『ニコマコス倫理学』（朴訳、2002）、『動物部分論他』（坂下訳、2005）、『トピカ』（池田訳、2007）、『生成と消滅について』（池田訳、2012）が入っている。ほかにも重要な著作があり、新訳の収録が予定されている。文庫も岩波文庫をはじめいくつかの版元から出版されており、入手可能なものも多い。

クセノポンの哲学関連の書物としては、『ソクラテス言行録 1～2』（内山訳、2011-22）が出ている。同書の上巻は『ソクラテスの思い出』として刊行されていたものと同じである。

アリストテレスの弟子であるテオプラストスには、『形而上学（諸原理について）』『人さまざま（性格論）』『植物誌』『植物原因論』などがあるが、西洋古典叢書ではこのうち『植物誌』（全 3 冊、小川訳、2008～）がまもなく完結する。

ヘレニズム期（1） アレクサンドリア時代

ヘレニズム期の哲学で主要なものにストア派、エピクロス派、懐疑派がある。この時代の哲学について知るには、A・A・ロング『ヘレニズム哲学 ── ストア派、エピクロス派、懐疑派』（金山弥平

訳、京都大学学術出版会、2003）が最も役に立つ。この時代の哲学者の著作はほとんど失われており、その内容に関してはほかの著作家たちが間接的に引用する断片資料を通じて知るほかない。

まずストア派であるが、H・von アルニムが初期ストア派の断片資料を編纂しており（全 3 巻、1903-05）、西洋古典叢書でゼノン／クリュシッポス他『初期ストア派断片集』（中川・水落・山口訳、2000-06）として全訳されている。中期ストア派ではパナイティオスやポセイドニオスの断片集が考えられるが、今のところ日本語の翻訳は出ていない。

ストア派のライバルと目されるのはエピクロス派であるが、エピクロスについてはディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』第 10 巻所収の資料と、それに加えて、ヴェスヴィオ火山の噴火（後 79 年）によって埋没した都市ヘルクラネウムからの出土パピュロスの一つにエピクロスの『自然について』断簡がある。前者については、いささか古いが『エピクロス ── 教説と手紙』（出・岩崎訳、岩波文庫、1959）のほか、『ギリシア哲学者列伝』（下巻、加来訳、1994）が出ているが、『自然について』の断簡を含めた翻訳が西洋古典叢書で進行中である。

古代懐疑主義に関する資料は、西洋古典叢書でセクストス・エンペイリコス『ピュロン主義哲学の概要』（金山弥平・万里子訳、1998）、『学者たちへの論駁』（全 3 冊、同訳、2004-10）として全訳されており、懐疑主義のみならず古代哲学を学ぶための貴重な資料になっている。

ヘレニズム期（2） グレコ・ローマン時代

ローマ時代にギリシア文化受容において重要な役割を演じたのは

なんと言ってもキケロであるが、『キケロー選集』（全 16 巻、岩波書店、1999-2002）に主要著作が収められており、そのいくつかは文庫化されている。ただし、哲学関連では『アカデミカ』『トピカ』などは収録されておらず、翻訳の刊行が待たれる。同様に、エピクロス派ではピロデモスの著作断片（その多くはヘルクラネウム出土）の翻訳が海外でおこなわれているので、日本語訳の刊行を期待したい。同じ学派でも、ルクレティウスの『（事）物の本性について』は、樋口勝彦訳（岩波文庫、1961）、岩田義一・藤沢令夫訳（筑摩書房、1965）があったが、新しい訳が予定されている。塚谷肇訳（近代文芸社、2006）は現在のところ入手がむずかしい。この時代のストア派は後期ストア派と呼ばれているが、セネカは『セネカ哲学全集』（岩波書店、2005-06）ですべての著作が手に入る。セネカについては文庫でもいくつか出ている。エピクテトスは新訳（全2巻、國方訳、岩波文庫、2020-21）が出ており、マルクス・アウレリウスは西洋古典叢書の『自省録』（水地訳、1998）のほか、神谷訳（改訂版、岩波文庫、2007）、鈴木訳（講談社学術文庫、2006）が出ている。

博学な著作家プルタルコスの『モラリア 1〜14』（瀬口他訳、1997-2018）は、『英雄伝 1〜6』（柳沼・城江訳、2007-21）とともに西洋古典叢書で全巻が完結したが、その中に哲学関連の著作が多数含まれている。また、この時代には中期プラトニストと呼ばれる人たちによっていくつかのプラトンの入門書が書かれたが、西洋古典叢書では一括して『プラトン哲学入門』（中畑編、2008）に収録されている。

科学では医学のガレノスの翻訳が叢書にいくつか含まれている。今のところでは、『自然の機能について』（種山訳、1998）、『ヒッポ

クラテスとプラトンの学説 1』（全 2 冊、内山・木原訳、2005）、『解剖学論集』（坂井・池田・澤井訳、2011）、『身体の諸部分について 1〜2』（全 4 冊、坂井・池田・福島・矢口・澤井訳、2016-22）が出ている。

3 世紀以後の新プラトン派については、プロティノスの『エンネアデス』の新訳が待たれるであろう。『プロティノス全集』（全 4 巻＋別巻、水地他訳、中央公論社、1986-88）がかつて出ていたが、近年では文庫でも部分的に著作を収録した訳が出ている。プロティノス以降では、西洋古典叢書でポルピュリオス『ピタゴラス伝／マルケラへの手紙／ガウロス宛書簡』（山田訳、2021）、イアンブリコス『ピタゴラス的生き方』（水地訳、2011）が出ている。とくにイアンブリコス以後の後期新プラトン主義については、わが国ではあまり知られていないが、水地・山口・堀江編『新プラトン主義を学ぶ人のために』（世界思想社、2014）はこれについて知るための重要な文献と言ってよいだろう。

また、時代を同じくするボエティウスの『哲学のなぐさめ』（松崎訳、2022）はまさに古代世界の終焉を告げる著作と言うに相応しいものである。

以上、すべてを網羅した文献表にはほど遠いが、西洋古典叢書を中心に古代哲学の関連書目を紹介した。

2023 年 9 月

國方 栄二

古代ギリシア・ローマ時代の歴史書

古代ギリシア人・ローマ人は今日古典と呼ばれる数多くの優れた作品を生み出したが、その中には歴史書の類いが少なからず含まれている。その数は文学や哲学の領域に属するものに比して多くはないが、現代人を充分に楽しませる作品が残されている。ここでは、日本語訳の有無を示しながら、古代の歴史関係作品の紹介をすることにしたい。古代史研究に使われる資料についてもふれることにしよう。作品の執筆に使用された言語によって分け、ギリシア語、ラテン語の順に紹介していくが、近年日本でも一挙に研究の成果が増加した古代の終焉期（ないし「古代末期」）については、最後にまとめて紹介する。

まず、ギリシア語で書かれた作品から見てゆこう。

ギリシア語は古代を通じて文化言語であったから、ギリシア文化華やかかりし古典期（前5―4世紀）はもちろんのこと、ヘレニズム時代やローマ帝国時代でもギリシア語によって数多くの歴史作品が著わされた。

ギリシア人は紀元前8世紀頃からエーゲ海周辺に「ポリス」と呼ばれる都市国家を建設したが、それらは一つにまとまることなく、数多くの小さな国家群が独特の世界を形成していた。オリエント世

界などと同じように、こうした個々の都市国家の歴史を書こうとする動きもギリシア人の間でなかったわけではないが、その成立はむしろ遅く、かつ歴史叙述の主流にもならなかった。ギリシア人の住地は海に面し、彼らは植民活動をしながら広い世界に出たために、自国よりもはるかに古い歴史をもつ民族が彼らの外の世界に存在することを容易に知りえたし、また強大な支配力をもつ大国家があることも知っていた。そして、そうした大国家についても、太古の以前から一貫して同一の国家が存続してきたのではなく、世界に覇を唱える国家は次々と変わってきたということすら彼らは認識できたのである。「歴史の父」と呼ばれるヘロドトス（前 485 頃―430 以降）の著作はそうした背景の下で生まれた。彼の有名な著書『歴史』9 巻（松平千秋訳、岩波文庫所収）は、一般には紀元前 5 世紀初頭に生じた東方の大帝国ペルシアとギリシア人との戦い、いわゆるペルシア戦争を扱ったものと言われがちだが、著者はけっしてギリシア贔屓に終わることなく、ペルシア帝国の歴史を基軸にしつつ、実に広い見地から当時知られうる「世界」の叙述をおこなっているのである。

ヘロドトスは現在のトルコにあたる小アジアの西岸南部の町ハリカルナッソスに生まれたが、若い頃政争に巻き込まれて亡命せざるをえなくなり、また黒海北岸からエジプト中部、そしてリビアに至るまで大旅行をして、見聞を広め、研究活動をおこなった。この「研究活動（ヒストリエー）」こそ、「歴史」の語源である。作品の主題はペルシア戦争であっても、狭い意味の歴史的事件だけを記述したのではなく、彼が調査した成果である地理、風俗、そして宗教など豊富な叙述を含んでおり、多くの逸話をも収録していて、古代ギ

リシアの歴史の予備知識がなくとも実に興味深く読める作品である。妻である后の美しさを自慢して、臣下にその裸体を覗き見させ、そのために后ばかりか自分の命まで失ってしまう「カンダウレス王の話」など、後世の作家に素材を与えた物語も少なくない。

しかし、そうした逸話の豊かさ、調査して回った先々で聞いた話を無批判に盛り込んだゆえに、後世、ヘロドトスには「作り話」が数多く含まれていると批判された。ギリシア人の間でもそうした批判はなされた。それゆえ、歴史家として後継者となったトゥキュディデスは、人の話を無批判に紹介したりせず、厳密に調査して書くことを旨としてその史書を著わすことになった。

トゥキュディデス（前 460 頃―400 頃）は、前 431 年に始まったギリシア世界を二分する大戦争、ペロポンネソス戦争の歴史を叙述した古代ギリシア最高の歴史家である。ペルシア戦争終結後のギリシア世界では、ペルシアの侵攻を退ける中心となったアテナイがペルシアの復讐に備えてデロス同盟を作り、盟主となって栄えた。しかし、次第に他のポリスを支配するようになって、いまひとつの強力なポリスであるスパルタと対立。両者の間にギリシアの覇権をめぐって起こったのが、このペロポンネソス戦争である。アテナイに生まれ、自らもこの戦争に参加して亡命を余儀なくされたトゥキュディデスは、その著作の第 1 巻で歴史の方法や戦争の原因論、そして戦争に先立つアテナイの繁栄期の歴史を描いた後、第 2 巻からは自らも体験した戦争の歴史を、厳密に年代を追って、また夏と冬に分けて叙述している。このような年代記の形式を採用しても『歴史』が読者を退屈させないのは、その文章の重厚さのゆえであろう。悲惨な戦いや戦争初期の疫病流行などの緊迫した状況とその時の人々

の心理が、臨場感、緊張感を伴ってはるかに時を隔てた現代の読者にも伝わってくる。文中に登場人物の多くの演説を含むため、原文のギリシア語は散文として最も難解なものの一つに数えられるであろうが、幸いわが国では古くからある青木巌、久保正彰、小西晴雄各氏の3種類の訳に加えて、西洋古典叢書の藤縄謙三・城江良和両氏による新訳も刊行され、この傑作を楽しむことができる。

ところで、ヘロドトスに比して方法の厳密さを強調する彼の歴史研究は、近代になってから、歴史を語る際の根本史料の厳密な批判を旨とする学として近代歴史学が成立したために、その先駆的存在として誉め讃えられてきた。しかし、この立場のために、トゥキュディデスが叙述する対象は同時代のギリシア世界に限定され、しかもその中でも政治と軍事に限られてしまい、作品はヘロドトスに比べ視野の狭い一面的なものになってしまっていることは見逃せない。そして、この方法が一時期、ギリシア人の歴史叙述の主流になった。

トゥキュディデスの著作は、著者の死によって前411年の記述で中断され、未完に終わった。これを引き継いだのは、哲学者ソクラテスの弟子として知られるクセノポン（前427頃―354頃）である。西洋古典叢書で本邦初訳が刊行された『ギリシア史』（根本英世訳）は、ソクラテスの弟子ながら職業軍人として活躍したこの人物が、トゥキュディデスを引き継いでペロポンネソス戦争が終わる（前404）まで、さらには前4世紀に入り、前362年の事件までを叙述する。全7巻であるが、先輩歴史家二人の著作ほど大部ではない。古代では大物歴史家のうちに数えられていたこのクセノポンは、19世紀のヨーロッパで近代歴史学が成立すると、充分な調査もなく記述し叙述にも緊張感がないと批判されることになったが、ペロポン

ネソス戦争に敗北したアテナイで生じた民主政の廃止や復活をめぐる悲劇的諸事件の叙述は印象的であり、民主政国家として有名なアテナイの当時の混乱ぶりを理解するために、今日でも重大な史料であることに変わりはない。

クセノポンは膨大な著作を遺したが、初めてこの作家に接する読者には、上記の『ギリシア史』とともに、『アナバシス』（松平千秋訳、岩波文庫）を読まれることが望ましいであろう。クセノポンはギリシア人傭兵隊の長としてペルシア帝国の王子キュロスの反乱に参加したが、反乱は失敗してクセノポンは兵士1万人を率いて敵中を突破し逃避せねばならぬ羽目になった。この決死の退却を自ら綴ったのが『アナバシス』であり、わが国では西洋古典文学の大家による好訳で楽しむことができる。

さて、ペロポンネソス戦争後の前4世紀のギリシアでは、ポリス同士やポリス同盟間の争いが東方の大国ペルシアを巻き込んで一層激しくなったが、この時代にクセノポン以外にもクラティッポスやテオポンポスのように、トゥキュディデスの史書に続けて『ギリシア史』を著わす人が出た。しかし、テオポンポスの場合はそれを途中でうち切って、ギリシアの北方に位置する新興国家マケドニア王国に目を転じ、その王ピリッポス2世にちなんで『ピリッピカ（ピリッポス史）』を書いた。このピリッポス2世が前4世紀後半にはギリシア世界の覇権を握ったため、ギリシア人史家はポリス世界を離れ、再び大国、強国に目を向けはじめたのである。一方で、エポロスが、それまでのギリシア人の歴史叙述のまとめを企てている。ただ、残念ながら、これらの作品はすべて断片しか残されていない。

なお、トゥキュディデス後の時代に、ヘロドトスと同様に東方世

界の歴史を書いた史家にクニドスの医師クテシアスがいる。著作そのものが残っていないために一般にはあまり知られてないが、後世の著述における引用や言及によって間接的にその作品『ペルシア史』や『インド誌』の内容を知ることができる。9 世紀のビザンツ帝国の学者ポティオスの残したクテシアス『ペルシア史』の「摘要」は、ヘロドトスが扱っていない時代を記した貴重な作品で、阿部拓児氏の訳ですでに学術誌に日本語訳が発表されている（『西洋古代史研究』所収）。ごく近い将来、クテシアス作品全体が阿部氏の訳で、西洋古典叢書の一冊として読めることになろう。

さて、ピリッポス 2 世の子が有名なアレクサンドロス（アレクサンダー）大王である。彼は、マケドニア兵およびギリシア兵を率いて東方に遠征し、仇敵ペルシア帝国を前 330 年に滅ぼして、ギリシア世界とオリエントにまたがる大帝国を建てた。ここから、いわゆるヘレニズム時代が始まる。遠征でインドにまで達したアレクサンドロス大王の驚嘆すべき事績のために、カリステネスやオネシクリトス、そしてクレイタルコスといった同時代人によってその歴史が書かれたが、これらは純粋な歴史記述というよりも想像を交えた歴史小説に近いものと今日では評される。サモスのドゥリスの『ギリシア史』、ピュラルコスの前 272 年から 220 年までの歴史を扱った書物も、同様の傾向があったらしい。しかし、これらの作品は伝わっておらず、後世の文献を通じて知りうるだけである。ラテン語では、クルティウス・ルフス『アレクサンドロス大王伝』があり、後で述べよう。

ヘレニズム時代には、シチリアのティマイオスやビテュニアのニュンピス、そしてピロコロスらによって都市や地方ごとの歴史も

書かれた。一方、アレクサンドロス帝国の成立によって、ギリシア人の世界が東方に大きく開かれたため、大王の部下でインドに航行したネアルコスやインドの宮廷を訪れたメガステネスが報告書を書いた。前2世紀にはアガタルキデスが地理書を著わし、また今日の南フランスのマルセイユの人であるピュテアスが西方に向かって探検航海した旅行記を書いている。しかし、大王の死後、帝国が分裂してゆくと、まもなくギリシア人の歴史家たちの関心は、西方の新興国家ローマに集められることとなった。ヘレニズム時代には、エジプトの祭司マネトンがギリシア語で『エジプト史』を、バビロンの人ベロソスが『バビロニア史』を書いたが、ペルシアが滅んでオリエントに強国がなくなると、歴史家の強国への関心はやがてローマに向かったのである。

ローマはイタリア半島中部の小都市国家から出発して領土を拡大し、前3世紀にはイタリア半島を統一して海外にも進出して、対立する商業国家カルタゴと三次にわたるポエニ戦争を戦い勝利した。東方世界にも干渉して、前2世紀にはギリシアへも影響力を強めていた。こうしたローマ人興隆の過程を描いたギリシア人がポリュビオス（前198―117頃）である。彼はもともとギリシア人都市国家の政治家であり軍人であったが、政治的理由により人質としてローマ市に連行され、ローマが「世界」を制覇する様子を内部からつぶさに見ることになった。その成果が40巻の大部な『歴史』にまとめられたが、現在残されているのは最初の5巻といくつかの断片である。それでもかなりの量であり、この作品のおかげで私たちは有名なポエニ戦争について詳細な情報を得ることができる。ポリュビオスは、ローマの進出によりギリシアや東方まですべての「人の住

む世界」が関係するようになったとして、叙述において明確に「世界史」を意識している。また、ローマ興隆の原因を有名な混合政体論などで合理的に説明しようと試みている点が特徴的である。政治家であった彼は、実際の政治に役立つことを歴史研究の目的にしていたためである。わが国では、最初に竹島俊之氏の訳（龍渓書舎刊）が刊行され、次いで西洋古典叢書の城江良和氏訳が完結した。

ポリュビオスは自分に先行するギリシア人史家ティマイオスの史書（断片のみ残る）につなぐかたちで叙述を始めたが、ポリュビオスより後も、彼に続けてストア派哲学者のポセイドニオス（前135―51）が『世界史』52巻を書いた。多くの読者を得たようであるが、今日では断片しか残っていない（一部、「ケルト誌（ケルティカ）」断片が月川和雄氏によって訳されている。『昭和薬科大学紀要』所収）。むしろ、ハリカルナッソスのディオニュシオス（前60―後7）が、最古期から第1次ポエニ戦争開始までの、ポリュビオスが扱わなかった古い時代を、『ローマ古代誌』に著わしたことが注目されるが、残念なことに日本語訳はない。ハリカルナッソスのディオニュシオスの修辞学関係作品は西洋古典叢書で訳が刊行されているので、『ローマ古代誌』の訳刊行も期待したい。

さらに、ローマ帝政時代に入ると、その初期、シチリアのディオドロスがこれまでの歴史叙述の成果をまとめて、宇宙の生成からカエサル（シーザー）のガリア遠征（前50年代）までを記述する『世界史』（原題は『文庫』）という長大な作品を著わした。また、ダマスクスのニコラオスも、ほぼ同じ頃に144巻の『世界史』を著わして、オリエントの古代からローマ帝政初期までを記述した。ディオドロスの作品はかなり残っており（1―5巻と11―20巻は完全に、他は断片で）、

歴史研究の史料として重要である。すでに『神代地誌』の名で最初の部分の訳が飯尾都人氏の手で刊行されており（龍渓書舎刊）、ピリッポス関係の巻について森谷公俊氏の訳も学術誌上に発表されている（『帝京史学』所収）。その歴史記述は、内容的には先行の記述を「糊とハサミ」でつないだようなもので独創性はないが、古代史研究には重要な史料となっている。

さて、共和政末期の内乱状態を克服しローマ国家をまとめ上げたカエサルの養子オクタウィアヌスは、前 27 年から帝政を始めた。地中海周辺世界には帝国の秩序がゆきわたり、人々は平和と繁栄の時代を享受した。帝国の公用語はラテン語であったけれども、帝国東半分ではギリシア語が半ば公用語として用いられ、ギリシア語で歴史作品も書かれつづけた。アレクサンドリアのアッピアノス（90―165）はローマ初期から紀元 2 世紀初めまでの歴史を 24 巻に書いたが、一部は失われ、今日では共和政末期の内乱時代についての部分が重要史料とされており、一般に『内乱史』の名で知られている。ヌマンティア戦争に関わる部分のみ、楠田直樹氏による訳が大学紀要に発表されている（『創価女子短期大学紀要』所収）。3 世紀初めにローマの政治家として最高公職にまで就いたギリシア人のディオン・カッシオスも、共和政期から自身の時代までの長大な『ローマ史』80 巻を記した。この書物はローマ史の通覧史料としてきわめて重要な作品であるが、完全に残ったのは 36―54 巻のみで、今日使用する原典テクストには断片や後世の作家の抜粋から復元・編集された部分も多い。これも日本語訳はなく、今後の訳業に期待される史書である。同じく 3 世紀には、ヘロディアノスという作家が哲学者皇帝マルクス・アウレリウスの死（180 年）から 3 世紀中頃までの

政治的事件を中心にした歴史書を書いている（日本語訳なし）。2―3世紀は歴史分析のための文学的史料がたいへん乏しいので、この書も研究には有用である。ただ、哲学者でもある皇帝マルクス・アウレリウスが不肖の息子コンモドゥスに帝位を継承させてローマ帝国は衰退に向かうというきわめて重要な時代を書いたにしては、内容は貧弱で、記述の信頼性もディオン・カッシオスのそれに劣る。

ローマ帝政時代で出色のギリシア語による歴史叙述者といえば、1世紀のユダヤ人ヨセフス、2世紀初めの文人プルタルコス、そして政治家・将軍でもあったアリアノスがあげられよう。ヨセフスは後37ないし38年にエルサレムで名門の家系に生まれたが、かの暴君ネロ治世の末期に生じたユダヤ人反乱に参加して敗北、ローマの鎮圧軍の将ウェスパシアヌスに投降した。指導者として処刑されるところであったが、ヨセフスは、このウェスパシアヌスがやがてローマ皇帝になると預言し、ネロ死後の紀元69年の内乱に勝利して預言通りにウェスパシアヌスが皇帝になったため、許されて皇帝に厚遇されたという数奇な運命をたどった人物である。皇帝の長男ティトゥスのエルサレム攻撃に同行して同胞に投降を勧め、70年夏にエルサレムが陥落して最終的に反乱が鎮圧されるとローマに帰ったが、ユダヤ人からは裏切り者視されることとなった。2世紀初めまで存命したヨセフスは、皇帝家の庇護のもとで文筆生活を送り、ユダヤ反乱の原因、経過、結末を書いた『ユダヤ戦記』、ユダヤ民族の栄光ある歴史を書いた『ユダヤ古代誌』、この書へ寄せられた疑問、とりわけユダヤ民族の古さに関する疑念に対しておこなった反論の論文『アピオン反駁』、そして『自伝』を残した。なかでも『ユダヤ古代誌』は20巻の大作である。一方、『ユダヤ戦記』7巻は戦記

文学の読み物として興味深いだけでなく、新約時代史のきわめて重要な史料でもある。これらヨセフスの全作品はすでに日本語訳が刊行されており（新見宏・秦剛平訳、ちくま学芸文庫）、この評価の難しい人物の語りに、日本語で楽に接することができることは喜ばしい。

2 世紀の伝記作家として有名なプルタルコス（プルターク、後 46 頃―120 以降）は、「アレクサンドロスとカエサル」というような比較的似た人物をギリシア人とローマ人から選び出し、それぞれの生涯を語った後に両者を比較するという形式で伝記作品を書いたことで有名である。その書はこの形式により『対比列伝』と表わされるが、英雄ばかり取り上げているわけではないにもかかわらず、わが国では古くから一般に『英雄伝』と呼ばれている。最初は英語から重訳され、次いでギリシア語原典から青木巌氏が訳出した。第 2 次世界大戦後、河野与一氏の全訳（岩波文庫）と村川堅太郎氏編集による選訳（ちくま文庫）が刊行され、現存する 22 組のギリシア・ローマ人の伝記が文庫版で楽しめるようになった。さらに、西洋古典叢書でも、柳沼重剛・城江良和両氏訳で新訳刊行が進行中である。

この伝記集は、人物の関わった事件の詳細よりも人物の性格を描写することに優れており、逸話が豊富で読み物としておもしろいが、歴史研究の素材としては慎重な取り扱いが必要になる。ギリシア・ローマ史を専門に研究する学者にとっては、この伝記集よりもさらに量的に多いプルタルコスの著作『モラリア（倫理論集）』に含まれる随筆が、生活史や社会史の研究の資料としてもっと活用されるべきであろう。こちらについては、西洋古典叢書でかなりの部分の訳が刊行された。プルタルコス『モラリア』と同様に、歴史の研究にも有用な作品である 2 世紀のアテナイオス『食卓の賢人たち』も、

柳沼重剛氏によって西洋古典叢書と岩波文庫に訳出されているので、合わせて楽しみたい。

2世紀前半にローマの政治家・将軍として活躍したアリアノスは、ストア派の哲学者エピクテトスの弟子であり、アリアノスの筆記のおかげでこの哲学者の教えである『談論』『要録』が後世に残った。それだけでなく、このアリアノスはかのクセノポンにならって『アレクサンドロス東征記』を書き、アレクサンドロスの事績を今日に詳細に伝えている。また、その付録として書かれた『インド誌』は、ヘレニズム時代に書かれた同様の書を史料として含んでいる。アリアノスはこれら以外にも多くの戦記物、伝記などを著わした。『アレクサンドロス東征記』と『インド誌』は大牟田章氏の渾身の訳業があって（東海大学出版会刊、ならびに岩波文庫）、研究者にも一般読者にもたいへん貴重なものとなっている。

最後に、歴史に深い関係を持つ地理書にふれておこう。ギリシア人による地理書執筆は、ヘロドトスよりさらに古いヘカタイオスの『世界周記』より始まるといってよいが、ローマ帝政時代初期に生きたストラボン（前64年生）がその代表であろう。小アジア（トルコ）のポントスのアマセイアに生まれたこの人物は、20歳代に首都ローマで学び、さらに大旅行をして『歴史備忘録』と『地誌』を著わした。前者は、かの史家ポリュビオスが筆を擱いたところから、オクタウィアヌス（後の皇帝アウグストゥス）によるアレクサンドリア攻略までを記した47巻の作品であるが、現存しない。ストラボンを有名にしているのは後者で、この中にも歴史記述が含まれており、彼を単純に地理学者と呼ぶのはふさわしくないかもしれない。この長大な『地誌』は日本語訳が刊行されている（飯尾都人訳、龍渓書舎刊）。当

時の「人が住む世界」であったヨーロッパ、アジア、アフリカの各地について、自然から住民の風習まで豊富な話題が盛り込まれ、興味つきない書物である。

もう一人、2 世紀後半にギリシア全土を取材して、各地に残る名所や旧跡を案内した書物『ギリシア案内記』10 巻の著者パウサニアスを紹介しておきたい。この書物には、ギリシア各地に伝わる神話･伝承、歴史的事件、宝物や行事などがぎっしり書きこまれており、今日ギリシアを旅しようとする者にも有用な作品である。それにとどまらず、発掘された遺跡を確定する史料としても研究上きわめて重要なものである。わが国では、第 1 巻「アッティカ」、第 2 巻「コリント、アルゴリス」そして第 10 巻「ポキス」に関して、馬場恵二氏により考古学的研究を踏まえた懇切な注釈を付した訳が、旅行の際の携帯に便利な文庫版で出されており（岩波文庫所収）、飯尾都人氏の大部な全訳も刊行されている（龍渓書舎刊）。

ギリシア語で古代に書かれた歴史書はおおむね以上のごとくである。古代のギリシア人によって膨大な数の歴史作品が書かれたが、その多くが散逸し、今日では名前が知られるだけであったり、断片としてしか残されていなかったりするものも相当な数にのぼる。ギリシア人の歴史家が残した作品の断片については、ヤコービ編『ギリシア史家断片集』にかなり収録されていて、研究のためにギリシア人の歴史家の全貌を知ろうと思えば、この大部の書物を繙かねばならない（新版はインターネットでも利用可能）。しかし、古代ギリシア人の歴史書を楽しむことだけが目的なら、まずはヘロドトスの『歴史』、あるいはクセノポンの『アナバシス』を読むのがよいだろう。なお、以上で述べてきたギリシア人の歴史叙述と歴史研究の性格に

ついては、解説書として藤縄謙三著『歴史学の起源 ── ギリシア人と歴史』（力富書房、1983 年）がある。ここでの紹介もこの書を大いに参考にさせていただいた。また、現代歴史学において古代ギリシアの歴史家の作品や見解が持つ意義については、大戸千之著『歴史と事実―ポストモダンの歴史学批判をこえて』（京都大学学術出版会、2012 年）が詳しく論じているので、ぜひ参照されたい。

次に、ラテン語の歴史作品を紹介してゆこう。ローマ人が母語であるラテン語を用いて歴史を記述するようになったのは、ギリシア人の歴史叙述の始まりに比べてずいぶん遅れた。大神官が毎年の公職者の名前や出来事を記録したものは古くから存在したが、それらは歴史叙述というものではなかった。そして、ローマ人自身が初めて歴史を書いたとき、最初の史家ファビウス・ピクトル（前 3 世紀末）はギリシア語で書いたのであった（わずかの断片のみ残る）。

先述したように、ローマは中部イタリアの一都市国家から勢力を拡大させて、前 3 世紀前半にはイタリア半島を統一した。この過程で、ギリシア文化の色濃い南イタリアから首都に人々が到来し、ローマ人の文化的発展を促した。前 2 世紀にローマがギリシア世界に影響力を行使しはじめると、ギリシア本土からの文化の流入が盛んになった。こうした中で、前 2 世紀前半に南イタリア出身でギリシア文化に通じたエンニウス（前 239―169）が、叙事詩『年代記』で、建国から自身の時代に起こった東方での戦争までのローマの興隆を歌っているのがまず注目されよう（600 余行のみ断片で残る）。ただ、ラテン語で初めて歴史書を書いたのは、このエンニウスを首都へ連れてきた、しかしギリシア文化嫌いで有名な大カトー（マルクス・

ポルキウス・カトー、前 234―149）であった。ローマ建国譚から自らの時代に至るまでのローマと周辺民族の歴史を書いた『起源』がその作品である。ただ残念なことに、これは梗概と断片しか残されていない。大カトーの作品でよく残っているのは『農業論』で、保守的なローマ人の典型としばしばいわれるこの人物の農業経営に関する知識と見解を示している。これは、ローマ最大の学者といわれたウァロ（前 116―27）の『農業論』3 巻や 1 世紀のコルメラの『農業論』、および 2 世紀初頭に活躍した小プリニウスの『書簡集』などとともに、ローマの土地所有形態や農業経営、農民・奴隷そして所領主の生活などを知るきわめて重要な史料となっている。もっとも、いま述べた諸作品は、小プリニウスの『書簡集』を除くとまだ日本語には訳されていない。

大カトーに続いて、共和政時代末期の前 2 ― 1 世紀にラテン語による歴史書が多く書かれるようになった。しかし、史家たちは大神官の書く記録、つまり「年代記」の形式をとった。それらについては、今日ではわずかな断片しか知られていない。

ところで、大カトーは前 2 世紀に活躍した政治家であるが、彼に次いで注目できる歴史書を書いたのも、大政治家であり将軍であったカエサル（ジュリアス・シーザー、前 100―44）である。カエサルの作品として今日読むことのできるものは『ガリア戦記』と『内乱記』である。ただ、カエサルの作品は厳密には「覚え書き」に近いもので、純粋な歴史書とは一線を画すべきかもしれない。現在のフランスにおおむね相当するガリアへの遠征やローマ人同士の内乱の際における作戦行動などを、「カエサルは」と三人称で記述するその作品は、著者の意図が自己の正当化にあったのか、ローマ中

央政界への報告にあったのかはともかくとして、たいへん流麗なラテン語で書かれ、雄弁家であったカエサルを彷彿とさせるものである。國原吉之助氏による訳に加えて、高橋宏幸氏による新訳が刊行された。高橋氏により、『内乱記』と同じ写本で伝えられたカエサル作品に関連する3書『アレクサンドリア戦記』『アフリカ戦記』『ヒスパーニア戦記』も訳されている。訳者高橋氏の著書『カエサル「ガリア戦記」── 歴史を刻む剣とペン』（岩波書店）は、カエサルの諸作品を理解する上でよき導きとなろう。

今日ではさほど有名ではないが、ローマ帝政時代に学校で歴史を学ぶ際の教材として使われ、近代以降もローマで最も高名な歴史家として知られていたのは、このカエサルの支持者として戦闘や行政に活躍したサルスティウス（前86―35）であった。その主著『歴史』は残念ながら失われており、前63年に共和政ローマ国家を脅かした貴族カティリーナの反乱を扱った『カティリーナ戦記』と、北アフリカのヌミディアの王ユグルタとローマとの戦いを扱った『ユグルタ戦記』が残されている。ギリシア人の歴史学と異なって「世界史」を意識することなく、その簡潔で勢いのある文章で一つの事件を語った作品である。『カティリーナ戦記』については、『カティリーナの陰謀』と題して合阪學・鷲田睦朗両氏訳が刊行されており（大阪大学出版会刊）、西洋古典叢書でも翻訳計画が進行中である。

大カトー以来発展してきたローマ人のラテン語による歴史叙述は、帝政の初期に活躍したリウィウス（前59―後17）で一つの頂点に達したと一般にいわれる。『ローマ建国以来の歴史』142巻は、建都に始まり彼自身の時代である前9年の出来事に至るまでのローマの発展を、見事な文章で描いた作品である。1―10巻、21―45巻の

みが現存するだけであるが、断片や後世の作家の引用、そして古代の終わり頃に作られた『要約』から全体の内容をおおよそ知ることができる。最初の3巻について、早くから鈴木一州氏の訳注が大学紀要誌上において公刊されており（『神戸大学教養部紀要』、第2巻まで岩波文庫）、北村良和氏の全訳と編訳も出版されたが、西洋古典叢書でもラテン文学者とローマ史研究者による全訳の刊行が始まり、作品の冒頭からハンニバル戦争の初めまでとローマの東方世界進出時期の巻がすでに出版されている。すべての訳の完成が楽しみな作品である。上記の『要約』については米田利浩氏の全訳が公刊されている（北海道教育大学『史流』所収）。

ローマでは、一年を、その年の正月に最高公職である執政官（コンスル）に就任した人物2名の名で呼んだ。リウィウスが採用した歴史叙述の方法は伝統的な年代記の手法であり、「～と～が執政官の年」という表現で始めて、その年々の出来事を綴ってゆくやり方である。この退屈に流れがちなやり方を使ってでも輝かしいローマ興隆の歴史を存分に語ることができたリウィウスの語りの力量は、ルネサンス以降の西洋において最も権威あるローマ人歴史家として通用しただけのことはある。しかし、リウィウスは大カトー、カエサル、あるいはサルスティウスと異なり、実際の政治や軍事には関与しなかった。ギリシア人史家ポリュビオスの基準に従えば、歴史家たるにふさわしくなかったのである。そして、リウィウスは先行する年代記作家の作品などに基づいて執筆し、自身で調査、確認する作業をしなかった。したがって、大歴史家リウィウスの作品は、歴史研究のための史料であるより、ローマ興隆の歴史を歌った一種の叙事詩として、まずは文学作品として読まれるべきかもしれない。

リウィウスより少し前に生きたネポス（前 100―25 頃）は、『年代記』ほか多くの作品を著わしたと推測されているが、ローマ人と外国人、とくにギリシア人とを比較して著名な人物の生涯を紹介する『著名な人物たちについて』の一部が残されている。これは、一般には『英雄伝』として知られている作品で、先に紹介したギリシア人のプルタルコスと同じ手法であり、その先輩にあたるわけである。ネポスは 400 人くらいの人物を扱ったとみられるが、今日ではテミストクレス、ハンニバル、そして大カトーの伝記など一部のみが残る。幸い日本語訳が出されていて（山下太郎・上村健二訳、国文社刊）、手軽に読めるのはありがたい。歴史叙述としての正確さ、濃厚さには問題があるものの、プルタルコスとはまた違った性格の読み物として楽しめる。

さて、皇帝政治が始まったローマでは、初代皇帝アウグストゥスが共和政の再興を掲げたため、政治体制はきわめてあいまいな様相を呈することとなった。アウグストゥスの治世（前 27―後 14）に生を受け、軍人として活躍したウェレイウス・パテルクルス（前 20 年頃生）は、トロイア陥落から同時代の第 2 代皇帝治世までを綴ったその著『ローマ世界の歴史』（西田卓生・高橋宏幸訳、西洋古典叢書）の中で「古の由緒ある国家形態が回復した」と述べ、アウグストゥスの始めた新たな政治体制を共和政の復活とみなしている。

ローマ国家に平和が回復されて、優れたラテン詩人たちが権力者の庇護のもとで活躍し、アウグストゥス治世はラテン文学の黄金時代となった。現存する最古の建築書であるウィトルウィウスの『建築書』（森田慶一訳、東海大学出版会刊）も、この皇帝に呼びかけるかたちで始まっている。しかし、アウグストゥスの権力が養子であ

るティベリウスに移譲され、実質的な一人支配体制が強化されるようになると、そうした現実と共和政の伝統との間で、政治支配層の人々や知識人の苦悩は深まるばかりであった。帝政時代初期のこのような複雑な状況を背景にして、ローマ屈指の歴史家タキトゥスが誕生することになるのである。

タキトゥス（後 56 頃―120 以前）は、かの暴君ネロの治世に生まれ、帝国の政治的エリートとして公職を歴任し、「第二のネロ」といわれた暴君ドミティアヌスの恐怖政治も経験する。この皇帝の暗殺後に、つまり世にいう五賢帝時代に作品を次々発表した。まず、妻の父親ユリウス・アグリコラの生涯を描いた『アグリコラ』を、次いで移動前のゲルマン人社会の様子を伝える史料として有名な『ゲルマニア』を、さらにネロの死の翌年（後 69 年）からドミティアヌスの死（後 96 年）までの自分の生きた時代を描いた『同時代史』を、そして最後に主著『年代記』を公にしたのである。これらの作品は、國原吉之助氏の訳で、すべて日本語で味わうことができる（『アグリコラ』『ゲルマニア』『同時代史』はちくま学芸文庫、『年代記』は岩波文庫所収。『同時代史』は筑摩書房刊）。なお、タキトゥスの筆になるといわれる『弁論家に関する対話』という作品があり、帝政時代になってから弁論術が衰退したか否かをめぐる議論が描かれていてたいへんおもしろいが、まだ日本語には訳されていない。

『アグリコラ』には主人公が総督として統括したブリタンニア、すなわち現在のイギリスの様子が詳細に描かれ、『ゲルマニア』にはゲルマン系諸部族の風俗・習慣が紹介されていて、興味深いだけでなく、歴史史料としてきわめて重要である。『同時代史』は第 5 巻の初めまでしか伝存しないが、ネロ死後に生じた皇帝位をめぐる

内乱がいかなるものであったかをよく伝えている。総じてタキトゥスの作品は、皇帝政治に対する冷徹な批判精神に貫かれており、全般にわたって悲観的な見方に満ちている。また、人物評価は皇帝に限らず万人に厳しいものがあるが、最もそれが徹底しているのが主著『年代記』であろう。初代皇帝アウグストゥスの死（後14年）からネロの死（後68年）までを扱う。これも、「～と～が執政官の年」という形式で綴られた作品であるけれども、その磨き上げられた達意の文章とそれがもたらす臨場感・緊張感に読者は思わず引き込まれてしまう。心理描写に優れ、叙述の中で登場人物に演説させて効果を高めている点も、ギリシア最高の史家トゥキュディデスと共通する。第2代皇帝ティベリウスの悪意に満ちた慇懃さ、夫を殺害して息子ネロを皇帝にしたものの、やがてその息子に殺されてしまう哀れな母アグリッピナ、首都大火の犯人に仕立て上げられて迫害されるキリスト教徒たち。こうしたトピックをはじめとして、紀元1世紀のローマに展開した政治的陰謀など悲しみに満ちた歴史が語られる。この作品の中では、ティベリウス帝の甥ゲルマニクスを除いて、好意的に語られる人物はいない。皇帝たちはみな悪人か無能な人物として描かれ、こうした統治者でよく大帝国が維持できたと不思議がる者がいてもおかしくないほどである。

紀元1―2世紀、「ローマの平和」の時代には、歴史記述の重要な対象であった戦争は少なくなり、国境線での外敵との争いが中心となった。それでも歴史家はたくさん輩出したようで、たとえば有名な『博物誌』の著者大プリニウス（79年没）は、『ゲルマニア戦記』などを著わし（今日伝存せず）、また、哲学者皇帝マルクス・アウレリウスの師でラテン修辞学者のフロント（100―167以後）はパルティ

アとローマとの戦争を記述した（序文のみ残る）。当時、文人ルキアノスは『歴史は如何に記述すべきか』（ギリシア語作品、呉茂一・山田潤二訳、岩波文庫所収）という作品の中で、パルティア戦争が生じたときに大勢の人がトゥキュディデスやクセノポン気取りで歴史を書くようになったことを捉えて、戦争がただ一回の刺激でこれほど多くの歴史家を誕生させたのだから、戦争を万物の父と呼んだ古(いにしえ)の人（ヘラクレイトス）の言葉も嘘ではないと皮肉っている。

しかし、タキトゥス以後は、ラテン語による歴史叙述の力強い流れは見えにくくなる。もちろん、文学的営みは盛んであったし、この時代に書かれた作品には、ローマ史研究になくてはならない史料も少なくない。たとえば、軍人として活躍し、1 世紀末には国家の水道関係の最高責任者になったフロンティヌスの『戦略論』と『ローマの水道について』（英語からの重訳が今井宏氏訳で発表されている。原書房刊）。あるいは、タキトゥスの友人で『博物誌』の著者の甥である小プリニウスの残した『書簡集』（全部で 368 通。このうち、神田盾夫氏による 24 通の訳が岩波書店から、そして國原吉之助氏による 162 通の訳が岩波文庫で出されている）。そして、先述したフロントも時の皇帝たちとの往復書簡をも含む『書簡集』を残している。修辞学者でもあったクルティウス・ルフスは『アレクサンドロス大王伝』を残し、今日の大王史研究の材料を提供している（谷栄一郎・上村健二訳、西洋古典叢書）。しかし、タキトゥスを引き継ぐ歴史家は出なかった。2 世紀の前半にフロルスが『ローマ史概要』と題する 2 巻の書物（日本語訳なし）を著わしているが、リウィウスからの引用に基づく摘要にすぎない。

この時代で注目できるのは、タキトゥスより少し若いスエトニウ

ス（後 70―130 頃）であろう。この人物は皇帝政府で文書を扱う役職で活躍し、それゆえに国家が保存する資料を充分使って作品を執筆することができたらしい。膨大な著作をものしたらしいが、その作品として今日残されているのは、かのカエサルとアウグストゥス以後の諸皇帝、計 12 人の伝記である『カエサルたちの生涯』と、有名な文人・学者の伝記を集めた『著名な人々について』のごく一部だけである。前者は、一般に『ローマ皇帝伝』として知られているもので、同時代のギリシア人プルタルコスの伝記集としばしば比較されるが、スエトニウスはプルタルコス以上に個人の描写に力を入れていて、歴史的背景や脈絡を考慮しないほどである。まず主人公である皇帝の家柄の紹介から始まって、即位以前の状況、即位後の政治的業績や公私にわたる言行が紹介される。美徳といえる行為が紹介された後で、同一人物とは思えないほどのその皇帝の悪徳非道ぶりが語られる。スキャンダラスな逸話も豊富で読み物としては楽しいが、皇帝が関係しなければいかなる重大事件も記述されず、重要人物も登場しないのがこの伝記の常であり、歴史学研究の素材としては当然限界がある。ただ、タキトゥスのような洞察力はまったく感じられないけれども、タキトゥスの作品が重いと感じる読者には、この作品のジャーナリスティックなおもしろさは味わう価値があるかもしれない。タキトゥスのそれと同じく、國原氏の訳（岩波文庫所収）で楽しめる。なお、『著名な人々について』に含まれる『文法家・修辞家列伝』については、学術誌上に翻訳が発表されている（原賢治・大谷哲・小坂俊介訳、『Studia Classica』所収）。

ラテン語の歴史作品を欠いている 3 世紀を経て 4 世紀になると、母国語がギリシア語でありながらラテン語で歴史を書いたアンミア

ヌス・マルケリヌス（330頃―395頃）を見いだすことができる。軍人として各地を転戦したこの人物は、ドミティアヌス帝の死（後96年）から自身の時代であるウァレンス帝の死（378年）までを扱った『歴史』31巻を書いて、ローマ史叙述をタキトゥスの『同時代史』につなげたようであるが、今日では14巻以降のみ残り、353年以降、378年まで、著者の同時代の記録だけが伝えられる。ローマ帝国最後のラテン語史書の傑作であり、これによって、いくぶんか英雄扱いされているものの、有名な背教者ユリアヌス帝の姿や諸部族の大移動の開始などが詳細に明らかにされる。日本語訳が待ち遠しい作品であったが、いよいよ最初の部分が『ローマ帝政の歴史1 ── ユリアヌス登場』の題名で、西洋古典叢書の1冊として刊行されることになった（山沢孝至訳）。

以上、時代の流れとともにラテン語による歴史書を眺めてきたが、ローマ人には珍しく自国中心の歴史叙述になってはいない、ギリシア風の作品を忘れず紹介しなければならない。それは、ポンペイウス・トログスの『ピリッポス史』である。ピリッポスとはマケドニアの王でアレクサンドロス大王の父親であるピリッポス2世のことで、すでに述べたように、ギリシア人史家テオポンポスが注目したあの王のことである。その名にふさわしく、このピリッポス2世以降の時代が詳しく説明されているが、書物全体としてはギリシアの歴史叙述と同じく大国の移動を基軸にしている。すなわち、太古のアッシリア帝国のニノス王から始めて、メディア、次いでペルシア、さらにペルシア戦争を経てギリシアへの覇権の移行を語る。そして、マケドニア、ヘレニズム諸王国、ローマと続いて、トログス自身の生きたアウグストゥス時代にまで至るものである。もっとも、今日

伝えられたものは3世紀のユスティヌスの抄録を通じてであり、ユスティヌスの言葉で記された内容である。長い時間を扱い、かつローマに叙述が偏ることなく、地中海世界一帯を広く捉えられている異色の作品。自国の年代記に終始しがちで愛国的な傾向を持つローマ人の歴史叙述には珍しい、ギリシア人の歴史観に近いものが感じられる史書である。この書物、西洋古典叢書の一冊として、『地中海世界史』の名で本邦初訳が刊行された（合阪學訳）。ヘレニズム時代史を中心とした実にスケールの大きい歴史作品を楽しまれることをお勧めしたい。

最後に、ギリシア語、ラテン語取り混ぜて、古代の終焉期（ないし「古代末期」）に書かれた歴史作品を紹介しておこう。先に4世紀の歴史書の傑作であるアンミアヌス・マルケリヌス『歴史』を取り上げたが、古代の終焉期にはローマ史の流れを要約したラテン語の歴史書が数多く書かれた。エウトロピウスの『首都創建以来の略史』やアウレリウス・ウィクトルの『皇帝列伝』、それに作者不詳の『皇帝略記』などである。これらの作品は、いずれも内容は簡単な事実経過の記述が中心で、文学作品としてのおもしろみは少ないが、帝政期、特に他の文学的作品による情報の極端に乏しい2―3世紀の歴史を知るための史料として、歴史研究には非常に重要である。エウトロピウスについてもアウレリウス・ウィクトルについても、豊田浩志氏を指導者とする上智大学の研究会によって多くの訳注が付された翻訳の刊行がなされている（『上智史学』所収）。

古代の終焉期のラテン語歴史書で特記に値するのは、皇帝たちの伝記集『ローマ皇帝群像』（南川高志・桑山由文・井上文則訳、西洋古

典叢書）であろう。この作品は、スエトニウスの伝記集の後を受けて、117年に即位したハドリアヌス帝から、284年に没した2人の皇帝まで、正式に元老院に認められた皇帝ばかりでなく、対立皇帝、皇帝僭称者をも含めて70人以上の皇帝たちの生涯を扱っている。スエトニウスよりもさらに宮廷生活のゴシップ記述を好み、作者のまったくの創作と思われるものも含む怪書である。使用されるラテン語や文章の質、記述の内容、いずれもまったく感心しない代物ではあるが、娯楽文学と考えればおもしろい読み物である。たとえば、五賢帝第3番目のハドリアヌス帝の気前のよさに関する次のような話を伝える。ハドリアヌスが公共浴場に行くと、旧知の退役兵が浴室の壁に背中や身体のあちこちをこすりつけていたので、なぜそのようなことをするのかと尋ねると、身体をこすらせる奴隷を自分は持っていないからです、と答えた。当時のローマ人は浴場で金属製の垢取り器を使って奴隷に身体をこすらせていたのである。そこで皇帝はこの男に奴隷と、奴隷を養う費用を贈ってやった。ところが、皇帝がある日また浴場を訪れると、多くの老人が浴室の壁に身体をこすりつけていた。皇帝は命令を出して、彼らにお互いに身体を磨き合うようにさせたという。

『ローマ皇帝群像』は、このようなおもしろさ優先の伝記集なのであるけれども、実はその扱っている時代について他に充分な史料がないために、信憑性が低いにもかかわらず、歴史研究の材料としてきわめて高い評価を持っている。しかも作品自身が6人の作者によると自称しているが、19世紀末にドイツの一学者が、作者は1人ではないかと疑問を呈し、執筆時期も作品の中でいわれているとおりではないとしたために学界で論争が始まり、今日でも活発な研

究がおこなわれ、国際学会が盛んに開かれるほどの研究対象となっている。

古代の終焉期にはギリシア語でもラテン語でもおびただしい数のキリスト教文書が書かれた。歴史作品としては『教会史』が注目されるが、その最初のものであるエウセビオス『教会史』（秦剛平訳、講談社学術文庫）は歴史研究にも重要である。通説では同じくエウセビオスの作品とされる『コンスタンティヌスの生涯』（秦剛平訳、西洋古典叢書）も、キリスト教を公認し後期ローマ帝国の体制を築いた皇帝の人と行動を知る史料となる。

さらに後のビザンツ帝国時代初期になると、ユスティニアヌス大帝時代にプロコピオスが『戦史』や『秘史』を著している。『秘史』は、6世紀前半、ローマ帝国の西方における失地回復を成し遂げたとされる偉大な皇帝ユスティニアヌスについて、その私的な生活や行動を暴いた作品である。日本語訳が橋川裕之・村田光司両氏訳で学術誌上に発表され、和田廣氏訳で西洋古典叢書としても発表された。後者の訳者の和田氏には、この『秘史』を含めた多くの史料を紹介してビザンツ世界を解説する著書『史料が語るビザンツ世界』（山川出版社刊）があり、ローマ帝国東西分裂後の世界を理解するためにすこぶる便利である。

古代の終焉期は、ローマ帝国最盛期以上といってよいほど修辞学の優勢だった時代である。4世紀に修辞学的教養を活かしてギリシア語やラテン語で書かれた数多くの演説や書簡には、政治に関わった重要人物の手によるものが数多く伝存している。中でも、シュンマクス、テミスティオス、リバニオス、アウソニウス、シドニウス・アポリナリスなど、後期ローマ帝国の政治や文化を知る上でたいへ

ん貴重である。有名な「背教者」ユリアヌス（在位 361―363）と親交があった修辞学者リバニオスの『書簡集』の訳が西洋古典叢書としてすでに刊行され始めた（田中創訳）。また、オータンのエウメニウスやテミスティオスの演説が西村昌洋氏の訳で学術誌上において発表されている（前者は『西洋古代史研究』、後者は『Studia Classica』所収）ことは喜ばしい。これらは歴史書ではないが、後期ローマ帝国の政治や社会のリアルな姿を教えてくれよう。「背教者」ユリアヌス帝自身も、修辞学を活かした作品を多く残している。

古代の終焉期は、キリスト教が政治や社会で支配的になっていく時代であるため、古代ギリシア・ローマ文化は衰えていったように思われがちであるが、近年全世界的にますます盛んになってきている古代末期研究が新しい歴史像を提示しつつある。文学や哲学、歴史の資料が豊かに残る古代の終焉期を、拡大された「西洋古典の時代」と位置づけて、さらに知識を深めていきたいものである。

南川 高志

補遺　ますます進む古代ギリシア・ローマ史史料の翻訳

上掲の拙稿「古代ギリシア・ローマ時代の歴史書」は、古代ギリシア人とローマ人の残した歴史書や歴史関係文書のおおまかな紹介を試みた文章で、2017 年の『西洋古典叢書がわかる　リターンズ』刊行のために 2000 年刊行の『西洋古典叢書がわかる』初版に掲載された同じ題名の拙稿を改訂したものである。その記述は古代ギリシア・ローマ史学史と呼んでよいものであるが、合わせて西洋古代史の研究に関わりの深い西洋古典作品の日本語訳の有無も紹介している。このほど『西洋古典叢書　リターンズ』がインターネット公開されるに当たり、上掲の拙稿以降に発表された日本語訳が多数あるため、ごく簡単ではあるが情報を補っておきたい。

古代ギリシア語の歴史書・歴史関係文書の日本語訳

古代ギリシア史の研究のために有用な古典作品の日本語訳として、アテナイ史研究の基本史料たるアリストテレス『アテナイ人の国制』の新訳が橋場弦氏によって発表されたことをまずあげねばならない。今後、この橋場訳を参考に、アテナイ史研究の新たな展開が見られることを期待したい。

歴史書の翻訳としては、上掲の拙稿でも予告していたクテシアスの作品『ペルシア史／インド誌』の翻訳が刊行された（阿部拓児訳）。

これは、ギリシア世界の出来事を記述したかのトゥキュディデスやクセノポンらと異なり、ヘロドトスの「世界史」の伝統を受け継ぎ東方世界を描いた作品である。前 5〜4 世紀に生きた著者の原著は失われたが、数多くの伝承によって復元された。クテシアスはギリシアより東のペルシア帝国宮廷に滞在したが、逆に西の端に赴いたギリシア人もいた。前 4 世紀、ギリシア人植民市マッサリア（現マルセイユ）の航海者ピュテアスは「北の果て」にまで旅して、その記録を『大洋について』に著した。これも原著は失われ、後世の引用が残るのみだが、それらを基にしてピュテアスの航海を論じたオックスフォード大学名誉教授で著名な考古学者バリー・カンリフが著した書物が邦訳された（小林政子訳『ギリシャ人ピュテアスの大航海』青土社、2023 年）。

上掲の拙稿で、古代ギリシア人の歴史記述がトゥキュディデス的なギリシア史からヘロドトス的な強国中心の「世界史」記述に再び転換する時期の作品として、テオポンポス『ピリッピカ（フィリッポス史）』を挙げた。この書は、後世の抜粋や要約しか残っていないが、9 世紀のキリスト教聖職者ポティオス（フォティオス）の『図書総覧』（『文庫』と訳すこともある）に要約されたこの『ピリッピカ』を訳す試みがなされている（福島正幸・酒嶋恭平訳、『西洋古典研究会論集』掲載）。このポティオスは、先述のクテシアスの『ペルシア史』を要約した人物でもある。

時代は下って、前 1 世紀に生きたシチリア出身のギリシア人史家ディオドロスの全 40 巻に及ぶ長大な歴史書『世界史』（原題は、『文庫』。『歴史叢書』と訳す場合もある）については、すでに最初の 6 巻の訳を飯尾都人氏が『神代地誌』と題して刊行していたが、アレクサ

ンドロス大王史を研究する森谷公俊氏が、大王の記述部分である第17巻について翻訳し註を付して刊行した（河出書房新社、2023年）。森谷氏は、プルタルコス『英雄伝』中のアレクサンドロス大王の伝記についても訳して刊行し（河出書房新社、2017年）、さらにラテン語作品であるが、ポンペイウス・トログス（ユスティヌス抄録）『ピリッピカ（フィリッピカ）』からアレクサンドロス大王の歴史を記述した部分を訳出して発表した（『帝京史学』掲載）。この『ピリッピカ』は、「西洋古典叢書」では合阪學訳で『地中海世界史』の題名で刊行されている作品である。森谷氏はアレクサンドロス大王の東方遠征ルートの調査なども行っている。大牟田章氏の記念碑的な訳業であるアッリアノス『アレクサンドロス大王東征記およびインド誌』に加えて、森谷氏の数々の訳業と調査、そして澤田典子氏の古代マケドニア王国史研究と、日本のマケドニア／アレクサンドロス研究は非常に充実したものとなった。

ローマ帝政時代に生きたギリシア人のプルタルコスの多数の著作のうち、最も有名な『英雄伝』は、これまでも2種類の翻訳が刊行されていたが、「西洋古典叢書」でも柳沼重剛氏の訳業を引き継がれた城江良和氏によって翻訳刊行が完結した。さらに、プルタルコスの大部の『モラリア（倫理論集）』の「西洋古典叢書」での訳も完結した。『モラリア』最終配本の第4分冊には、ギリシア人とローマ人の習俗を扱った作品などが収められており、同論集の他のエッセイとは性格を異にしながらも、歴史を眺めるプルタルコスの目を理解させるところがあり、歴史研究にも有用である。同じく帝政ローマ下で生きたギリシア人パウサニアスの『ギリシア案内記』について、飯尾都人氏の全訳と馬場恵二氏の部分訳とがあったが、「西

洋古典叢書」で周藤芳幸・古山夕城両氏による新訳の刊行が始まり、まずスパルタとメッセニアに関する記述が周藤氏の訳で読めるようになった。

ところで、今日の古代ギリシア史の研究にとって最も重要な史料は何かと専門研究者に問えば、古典文学作品ではなく、法廷弁論ないし碑銘（碑文）と答える方が多いかもしれない。その点で、法廷弁論の中でも非常に有名なデモステネスの作品について、「西洋古典叢書」での翻訳が完結したことは意義深いと思われる。最終配本の第 7 分冊の中では、法制度や家族史、ジェンダーなど様々な点で歴史研究の重要史料となってきた「第 59 弁論　ネアイラ弾劾」も日本語で読めるようになったことが喜ばしい（栗原麻子訳）。

古代ギリシア人の諸ポリスは慢性的な戦争状態にあったといわれ、その歴史には規模の大きな戦争も幾度か見られたが、そうしたギリシア人の戦争について理解の参考となる当時の軍事マニュアルが訳出された。前 4 世紀に生きた「戦術家」と呼ばれるアイネイアスが書いた作品『攻城論』が、高畠純夫氏により解説・注解を添えて訳出・刊行されたのである（東洋大学出版会、2018 年）。

現在、古代ギリシア史の研究は政治・法制・経済から社会や宗教、心性へとどんどん広がりと深化を見せており、古代ギリシア世界、ギリシア語文化圏の社会の「闇」の面を伝える「魔術」「呪詛」の記録にも光が当てられてきている。そうした記録を残す碑銘の翻訳・注解作業に前野弘志氏が精力的に取り組んでいる（『史学研究』他に発表）。なお、古代の呪詛については、定評ある研究書の翻訳がすでに刊行されている（ジョン・G・ゲイジャー編、志内一興訳『古代世界の呪詛板と呪縛呪文』京都大学学術出版会、2015 年）。

ラテン語の歴史書・歴史関係文書の日本語訳

今日ローマの最も有名な歴史家として知られるリウィウスの作品『ローマ建国以来の歴史』の日本語訳は、「西洋古典叢書」の第6分冊が安井萠氏の訳で「ハンニバル戦争 (2)」の副題で刊行されるところまで進んだ（別途、ローマの東方進出を扱った第9分冊が、先行して2015 年に刊行されている）。第 6 分冊では、ローマがカンナエの戦いでハンニバルに敗れて窮地に陥った時期を扱う。同じローマとカルタゴとの戦争（ポエニ戦争）を扱った詩作品も刊行された。帝政期の詩人シーリウス・イタリクスの歴史を素材にした『ポエニー戦争の歌』である（高橋宏幸訳）。ごく近い将来、リウィウスの「ハンニバル戦争」部分の訳が完成して、シーリウス・イタリクスの長大な歴史叙事詩での戦争の扱いとリウィウスの記述とを比較できるようになるのが楽しみである。

ローマ帝国に生きた人々にとってはこのリウィウスよりも偉大と見なされていた歴史家がサルスティウスである。サルスティウスについては、貴族カティリナが共和国転覆を狙った事件を記述した『カティリナ戦記（カティリーナの陰謀）』と、ローマと北アフリカのヌミディア王国との戦争を描いた『ユグルタ戦記』が伝存するが、両方について、新しく栗田伸子訳（岩波文庫、2019 年）と小川正廣訳（西洋古典叢書、2021 年）が刊行された。

ローマ帝政期の歴史書としては、帝政後期のアンミアヌス・マルケリヌスの史書の翻訳刊行が始まったことが特記されよう（山沢孝至訳『ローマ帝政の歴史 1』西洋古典叢書）。その第 1 分冊では、「背教者」ユリアヌス帝が歴史の舞台に登場するまでが扱われている。こ

の作品には伝存しない欠損部分が多いが、それでも残された叙述すべての翻訳が完結して、ユリアヌス帝の時代やいわゆる「ゲルマン民族の大移動」に絡む激動の時代の歴史を日本語で楽しめる日を待ち望みたい。また、古代の終焉期に書かれた簡潔な歴史作品のうち、アウレリウス・ウィクトル『皇帝列伝』の翻訳が学術誌上で発表されていたが（アウレリウス・ウィクトル研究会訳、『上智史学』誌上）、2019 年に完結したことも喜ばしい。

歴史作品ではないが、歴史研究に深い関わりのあるものとしてローマ法の法文などの翻訳がなされていることも付言しておきたい。20 世紀の終わり頃から継続してなされてきた「テオドシウス法典」の翻訳・訳注に加え、パウルス『意見集』（早稲田大学ローマ法研究会訳、『早大法学』誌上）、ユスティニアヌス『法学提要』（田中創訳、『ローマ法学雑誌』）などが発表されている。

高校歴史教育の資料にぜひ西洋古代史史料の日本語訳の活用を

2022 年度から高校の歴史教育に必修科目として『歴史総合』が登場した。現代に近い時代を重点的に習う旧来の『世界史 A』と『日本史 A』を踏まえて新しく始まったこの『歴史総合』では、18 世紀以降の世界と日本を学習する。『歴史総合』は、「総合」という名前がついているものの、「世界史」と「日本史」とを合わせたというだけに留まり、世界史や日本史の全体を扱っているわけでは毛頭なく、古代ギリシアとローマの歴史は取り上げられない。しかし、この新必修科目では、その目的として、それまでの高校の歴史教育に比べて格段に歴史資料（史料）を重視し、これを読み込むことで歴史を考える「思考型」学習をすることになっている。そのため、

高校の先生方は授業で取り上げる歴史資料（史料）の収集と吟味、そして授業での取り扱い方に関して、以前よりも格段に多くの苦労をしなければならなくなったと聞いている。

こういう性格を持った『歴史総合』を必修として学習した高校生の皆さんが、選択科目として、古い時代から始めて歴史の全体を学ぶ『世界史探究』や『日本史探究』を学習する。この「探究」科目の授業が 2023 年度から開始された。『歴史総合』の学習で、問題の設定、史料読解、議論、検証といった勉強法、思考型学習を学んだ生徒たちに先生方は『世界史探究』を教えることになるため、さらに歴史資料（史料）収集に奔走されねばならなくなっている。だが、世界史の少なくとも西洋史の分野では、歴史資料（史料）は外国語で記されていて、日本語に翻訳されているものは新しい時代になるほど少なくなる。中世以降の西洋史研究では、日本語訳が存在する文学作品などを史料として利用することは元々多くの分野で稀であり、証書や統計資料などまずは日本語訳されないような分野の記録、未公開文書などを用いることが多い。

ところが、古代ギリシア人・ローマ人の世界については数多くの文学作品の日本語訳が第 2 次世界大戦前から存在し、特に「西洋古典叢書」創刊後は本邦初訳も増えて、日本語で読める歴史資料（史料）が格段に豊かになった。高校の先生方には、「西洋古典叢書」や岩波文庫、ちくま学芸文庫などで手軽に利用できるので、西洋古代史史料の日本語訳をぜひ授業で使っていただき、『世界史探究』を学ぶ高校生の皆さんに、歴史をより広く深く学ぶ素材を提供してもらいたい。歴史教育の大きな変更の機会に、上掲の拙稿およびこの補遺での紹介を参考に日本語訳された古代ギリシア人・ローマ人

の声を『世界史探究』の授業で活用され、より多元的な「思考型」学習の展開を目指してくださることを期待している。

2023 年 9 月
南川 高志

ギリシア文学の流れ

ギリシア文学史を年表の形にしてみると、際立った特色が浮かび上がってくる。世紀ごとに中心的なジャンルが移り変わること、ある時期まで一人の作家は一つのジャンルにしか手を染めなかったことである。たとえば日本文学史では、平安、鎌倉、室町、江戸、どの時代をとっても、詩歌もあれば散文の物語も歴史記述もあったのに対し、ギリシアでは一つの時代に語るに足るジャンルは一つしかなかった。これは一見すると、ギリシアの天才たちが新しい文芸ジャンルを切り開いて傑作を生み出しては、惜し気もなくそれを捨て去って、次々と新しいものに向かったようにも見える。しかし実際には、人間精神と時代との格闘の中から模索された表現形式が、その可能性を使い尽くし、もはや時代の激変に適応できなくなって、新たなる表現形式が求められざるをえなかったということであろう。

今から5000年ほど前には、印欧語共通祖語と呼ばれる言葉を語る人々がコーカサス山地の辺りに住んでいた。彼らが東西南北に移動して別れ住むことにより、スラブ語、サンスクリット語、ペルシア語、ギリシア語、ラテン語、ケルト語、ゲルマン語などが枝分かれしていったと考えられている。バルカン半島へは前2100年頃から1000年にわたり数次の民族移動の波が押し入り、先住民と混淆してギリシア民族が形成された。ギリシア人は前1600年頃からミュケナイ

文明を発展させるが、前 1200 年頃から各地で大規模な破壊が行なわれ、ミュケナイもトロイアも滅びてギリシアは暗黒時代に入る。

黎明は前 8 世紀にやって来る。各地に都市（ポリス）が成立し、植民活動が活発になり、第 1 回オリュンピア競技祭が開かれ、アルファベットが発明されて、ギリシアは歴史時代に入った。この前 8 世紀は、口承で伝えられたミュケナイ時代の思い出をもとに、古（いにしえ）の武人を神と人間の間に生まれた英雄（半神）と見なして、その栄光と苦悩を歌った叙事詩の時代である。この時代の詩人は、ムーサ（詩神）にとり憑かれて、あるいはムーサの啓示を受けて歌うと考えられた。

続く前 7 世紀と前 6 世紀は、詩人が「私」という一人称で歌うことを知った、抒情詩の時代である。ギリシアの地方ごとに異なった形式の抒情詩が発達し、地方（方言）と詩形式の一致ということも、ギリシア文学史の特色をなす。

前 5 世紀は悲劇の誕生から実質的な死滅までにぴたりと重なる。この時期にはまた喜劇も生まれた。叙事詩、抒情詩、劇はすべて韻文で書かれたが、前 5 世紀には散文も文学表現を担うようになり、歴史、哲学、医学、弁論などの著作が現われた。

前 4 世紀はアテナイが政治的、軍事的な力を失った時代で、プラトンとアリストテレスに代表される哲学と、デモステネスを頂点とする弁論の世紀と呼べよう。

アレクサンドロス大王の死（前 323）とともに始まるヘレニズム時代までには、ほぼすべてのジャンルが出揃っていた。久しく下火になっていた叙事詩や抒情詩もこの時代に装い新たに復活し、これ以後は、すべてのジャンルが並行して行なわれる。作家も、一人で多様なジャンルを手がけるようになる。

今日われわれは、神々や人間の姿を大理石でもって表わしたギリシア彫刻を見ることができる。その多くが裸体であるのは、服装や飾りでごまかされることのない、最も単純で最も真実な姿を把えて永遠化したいというギリシア人の欲求と関係があるだろう。言葉の芸術家も同じ欲求をもっていた。詩人たちは神の恵みや怒りについても、人間の偉大さと悲惨についても、最も理想的な（すなわち本質を最もよく把えた）形で描こうとした。そしてギリシア人は、その目的のために原型的な物語を作り出すのに巧みであった。

そのような特長を最もよく具現しているのは、ギリシア文学史の劈頭に現われるホメロスの叙事詩（前 8 世紀後半）である。ホメロスというのが実在した一人の詩人なのか、何世代にもわたる詩人たちの集合名詞なのか、それはいまだ解かれぬ謎である。ともあれこの詩人の名の下に、二つの長大な叙事詩が伝わっている。

『イリアス』はトロイア戦争 10 年目の戦場を舞台にした叙事詩である。ここでは不死なる神々の思い･行為と、死すべき人間の思い･行為が、時に混じりあいながら平行して進んでいく。神々は、地上にはびこりすぎた悪人の数を減らして大地の負担を軽くしなければならぬし、賓客として滞在した国から王妃ヘレネと財宝を奪って帰ったトロイア王子パリスを罰する必要もある。そして神々の中にはギリシア方に味方する者もあれば、トロイア方でわが子が戦っている神もいる。一方人間のレベルでは、英雄アキレウスが総大将に対する怒りから戦列を離れ、ために身代わりとして出陣した親友を死なせることになって、アキレウスの怒りは友を殺した敵将ヘクトルに向け変えられる。これにつれて、両軍の優劣は何度も所を変えるのである。わずか 50 日の出来事を語りながら、トロイア戦争の

遠因から結果の予感まで、そして天上天下の動き、人間の悲しみの美しさを、アキレウスの怒りというテーマの下に描き尽くした詩人の構想は、神業というほかない。

『オデュッセイア』は、トロイアを滅ぼして帰国の途についたオデュッセウスが、10年の海上漂泊の後に妻と再会し、無法な求婚者たちを誅殺する物語である。しかしこれとは別に、一子テレマコスが父の消息を求めて旅立ち、成長をとげつつ帰るという物語も組みこまれて、帰国者の物語、父親探しの物語、そして海の冒険の物語が一人の英雄のまわりに織りこまれる構想は、『イリアス』以上に複雑である。魅惑の歌声のセイレン、一つ目の人食い鬼キュクロプスなど、海の冒険を彩る民話モチーフもこの叙事詩の魅力になっている。

『ホメロス風讃歌』はホメロスの詩作技法に連なる後世の詩人たちの手になるもので、デメテル、アポロン、ヘルメス、アプロディテなどの神々を称える讃歌が33篇、神話の宝庫である。

ホメロスと同じ韻律を用いながら、ヘシオドス（前700頃）の二作はまったく趣を異にする。『神統記』は原初にカオス（空隙）、ガイア（大地）、タルタロス（地の奥底）、エロス（愛）があったこと、それらからいかにして夜や天空や海や山が生まれたか、そして度重なる戦いの後、いかにしてゼウスが世界の支配者になったかが語られる。ギリシアの神界の秩序づけ、神々の機能分担を明確にした書である。一方『仕事と日』は、ゼウスの正義の行き渡るこの地上で、人間がいかに生きるべきかを説く。ここで紹介される「五時代の説話」や、パンドラとプロメテウスの物語は思想史上重要なものであるが、後半で点描される日の吉凶や農民の迷信も民俗学の好個の資

料となる。ヘシオドスはホメロスと違って「私」を語っているので、精神はすでに次の世紀の人であったともいえよう。

抒情詩は英語で lyric というが、これは現代のリリシズムと結びつくものではなく、リュラ（竪琴）に合わせて歌う歌を意味するにすぎない。ギリシア人は抒情詩によって変愛も歌ったが、政治信条も述べたのである。

広義の抒情詩は、(1) アウロス（笛）の伴奏で歌う、というよりもむしろ語るものと、(2) 竪琴に合わせて歌う狭義の抒情詩、ギリシア語でメロス（歌）と呼ばれているものとを含む。アウロスに合わせた語りものはさらに、(a) エレゲイア（長短短の音節の組み合わせを用い、叙事詩の韻律に近い）という韻律を用いるものと、(b) イアンボス（短長短長の音節の組み合わせを基本にし、日常会話に近い）という韻律を用いるものに分類される。他方、狭義の抒情詩も、(c) 独唱抒情詩（monody）と、(d) 合唱抒情詩（choral lyric）に分けられる。

(a) エレゲイア詩人には、軍国調と言われるスパルタのテュルタイオス（前 7 世紀半ば）、憂愁の詩人ミムネルモス（前 7 世紀後半）、アテナイの政治改革者にしてギリシア七賢人の一人ソロン（前 640 頃―558）、例外的に 1400 行もの詩集が現存するテオグニス（前 6 世紀半ば）らがいる。

(b) イアンボス詩人としてはアルキロコス（前 700 年以前生まれ）、女性を豚、狐、犬などになぞらえた悪態詩で名高いセモニデス（前 7 世紀後半）、スラム街の乞食詩人ヒッポナクス（前 6 世紀半ば）らがいる。

このうちアルキロコスは、抒情詩の父と称えられ、この人が叙事

詩を書かなかったのはホメロスにとって幸せだった、とまで言われたが、それほどの名声にもかかわらず、伝存する詩は少ない。死んで不滅の誉れを残すというホメロス的な価値観に真っ向から反対して、楯を投げ捨て逃れ帰ったことを誇らしげに歌った詩は、以後繰り返し現われる「楯投げの詩」の走りである。婚約を破棄した娘と父親を罵る詩は激烈を極め、父娘を死に追いやったとも伝えられる。

(c) 独唱抒情詩人はレスボス島出身者が多い。七絃の竪琴の発明者とされ、スパルタに渡って音楽の力で内乱を鎮めたとされるテルパンドロス（前7世紀前半）、海賊に海に投ぜられたが海豚の背中に救われたというアリオン（前7世紀後半）、「酒は人の心の覗き窓」と酒の功徳を歌った最古の詩人アルカイオス（前7世紀末生まれ）、そしてサッポー（同じ頃）。

サッポーは十番目のムーサ（詩神）と称えられ、古代における評価は絶大であったが、キリスト教徒による度重なる焚書のゆえに、その作品のほとんどが失われた。しかしながら、復元された断片集でさえ、サッポーの詩の神韻のいくばくかを味わわせてくれる。

(d) 合唱抒情詩はスパルタを中心とするドリス地方で花開いた。スパルタ乙女がアルテミス女神に捧げ物をして舞い歌う「乙女歌」のアルクマン（前7世紀後半）、抒情詩で英雄伝説を歌うスタイルの確立者ステシコロス（前7、6世紀）、鶴群（たずむら）に殺害の仇討をしてもらったイビュコス（前6世紀半ば）、競技祝勝歌の創始者とされるシモニデス（前6、5世紀）、色彩豊かに物語を歌うバッキュリデス（前6世紀末生まれ）、そして最大のピンダロス（前518頃生まれ）。

ピンダロスについては幸いにも、オリュンピア、ピュティア、ネメア、イストミアの四大競技祭を舞台にした祝勝歌45篇が伝えら

れている。しかしその詩は勝利者を称えるべき場を借りて、華麗な語法で神話的イメージを呼び出し、むしろ影の夢のようなる人間の生に思いを致し、神々によって与えられる生の意味とそれを後世に伝える詩人の使命を歌いあげるのである。

前5世紀の100年の間に悲劇は興隆し、そして実質的な生命を終えた。この時代、ギリシアはペルシア戦争に勝利し（前480）、勝利の立役者となったアテナイは黄金時代を迎える。都市の守護神アテナ女神を祀るパルテノン神殿の建設が始まったのは前447年のことである。この国力の絶頂期に、アテナイの悲劇詩人たちがかくも深刻に人間の苦悩に思いを致し、人の世の量りがたさを繰り返しドラマ化したのは、いかなるわけであろうか。

アイスキュロス（前525／4―456）は90（あるいは75）篇の劇を作ったとされるが、今日に伝わるのは7篇のみである。大部分の悲劇は神話を題材にしているが、『ペルシア人』は同時代の事件をテーマにした珍しい例である。人類に数々の恩恵を与えたがためにゼウスから罰せられて苦しむ『縛られたプロメテウス』は、人類のための殉教者イエス・キリストの異教世界における予示だとも解釈された。一族の罪の連鎖を壮大なスケールで描いた『オレステイア三部作』。戦争も殺害も報復も、すべて神の正義の下にある、との厳粛な信念がアイスキュロスにはある。

ソポクレス（前496／5―406）は多作家であったが、現存するのは同じく7篇のみである。人間存在の底知れぬ闇を覗き見る思いを懐かせる『オイディプス王』。人間は神の知には与（あずか）ることができない。真実は何か、何が正しいのか、それを知らぬままにオイディプスも『アンティゴネ』も『アイアス』もわが意志の実現へと突き進み、

破滅する。まるで人間の偉大さを達成するためにはそれほどの犠牲が必要だとでも言わんばかりに。

エウリピデス（前 485 頃―406）の生涯に 92 と言われる作品の中、19 篇も現存するのは、古代において彼の劇が最も人気が高かったためである（その中の 1 篇は偽作とされ、1 篇はサテュロス劇という一種の滑稽劇である）。前口上で劇の背景を説明すること、終幕で筋の紛糾を解くために「機械仕掛けの神」を頻繁に登場させること、ソフィスト（新しい思考法と弁論術の教師）流の議論を登場人物が行なうことなど、エウリピデスは次々と形式上の新機軸をうち出したが、劇のテーマも新しく多彩であった。人間の苦悩を情念の面から掘り下げた『メデイア』『ヒッポリュトス』。亡国の女たちの嘆きと、戦争がいかに人間理性を奪い去るかを描いた『トロイアの女たち』『ヘカベ』。神の威力の前になす術を知らぬ人間の姿をさらす『バッコス教の信女たち』。スリル・サスペンスを追究するかと思われる『イオン』『オレステス』。エウリピデスは悲劇の可能性を求めてたえざる変革に向かうが、結果的にはギリシア悲劇の破壊者と呼ばれるような役割を果たしたかもしれないのである。

喜劇は三期に区分される。アテナイの黄金時代からペロポンネソス戦争敗戦（前 404）を経て前 400 年までを古喜劇、アテナイが衰退しマケドニア王国が興隆する前 330 年頃までを中喜劇、それ以後を新喜劇と呼ぶ。アッティカ（アテナイを中心とする地方名）喜劇の全期間を通じて、約 170 人の喜劇作家、約 1500 篇の作品名が知られているけれど、今日読むことのできるのは古喜劇のアリストパネスと新喜劇のメナンドロスのみである。

アリストパネス（前 445 頃―380 頃）は約 40 篇の劇を作り、今日 11 篇が残されている。アリストパネスは、いかに喜劇とはいえこれほどの言論の自由がよくぞ許されたと驚かれる烈しさで、時の政治家を罵倒し、交戦国スパルタと勝手に和平を取り結ぶ（『アカルナイの人々』『騎士』『蜂』）。センチコガネに乗って天上に『平和』の女神を探しに行くし、地上に絶望したら『鳥』の世界に共和国をうち建てる。男たちがいつまでも戦争をやめないので、女たちは性的ストライキで対抗する（『女の平和』）。一転して『蛙』は、アイスキュロスとエウリピデスの優劣を論じる文芸批評の劇であるが、悲劇詩人に対するアリストパネスのオマージュである。

新喜劇は古喜劇の激しい攻撃性や猥雑なエネルギーとは無縁の風俗喜劇に変貌をとげており、メナンドロス（前 342 頃―293 頃）もアリストパネスではなくエウリピデスの精神を継ぐと評される。「メナンドロスと人生よ、御身らは、どちらがどちらを真似るのか」と言われるほど人生の哀歓、人情の機微を描くのに巧みであった。『気むずかし屋』『調停裁判』など 4 篇がほぼ完全な形で残るほか、おびただしい名言名句が伝わっている。

ヘレニズム時代はギリシア語・ギリシア文化圏が大きく広がり、世界中からギリシア語作家が登場した時代、そして学問の時代であった。カリマコス（前 310 頃生まれ）はアレクサンドリア大図書館において、世界中の書物を集め、ジャンル別に分類し、解題を付す作業に従った文献学者であった。また世界各地の伝説や奇習や方言の蒐集にも携わったから、今日の用語で言えば民俗学者でもあった。800 巻にも及ぶ研究著作の中、伝存する断片は 1 巻分にも満たぬと

考えられているが、『讃歌』や『縁起集』の断片にも珍かな愛すべき物語が含まれている。

アポロニオス・ロディオス（前 300 頃―235 頃）もアレクサンドリア図書館の館長であり、ホメロスやヘシオドス研究の学識を傾けて『アルゴナウティカ』4 巻を書いた。これはイアソンと共にアルゴ船に乗りこみ、世界の果てまで金の羊毛皮を求めに行く英雄たちの冒険譚で、イアソンに対するメデイアの恋心の描写が新しい。

この時期に新たに創り出されたジャンルとして、テオクリトス（前 3 世紀前半）の『牧歌』が挙げられる。現存する 23 篇は必ずしも田園生活を歌ったものばかりではなく、神話を語るもの、少年愛の歌などもあるが、羊飼や牛飼の対話の形で歌われる田園の恋の歌は、後の文学に大きな影響を及ぼした。

ギリシア文学の魅力を語る時に忘れてならないのは、ローマ帝国治下のギリシア語圏で書かれた随筆の類いである。プルタルコス（後 46 頃―120 以降）の 22 組の『英雄伝（対比列伝）』は古今の伝記中の傑作である。『モラリア』の扱う話題は倫理のみならず、哲学、宗教、文学、政治、動物、科学、と及ばざるはなく、モンテーニュはこれをモデルにして『エセー』を書きはじめたのであろう。

ポリュアイノス（2 世紀後半）には古今の戦術にまつわるエピソードを集めた『戦術書』が、アルテミドロス（同じ頃）には世界各地を旅行して夢の解釈を集めた『夢判断の書』がある。アテナイオス（200 頃）の『食卓の賢人たち』は、今は失われた悲劇や喜劇からの引用の宝庫である。アイリアノス（2、3 世紀）の『ギリシア奇談集』は読書の合間に書きためたメモのようなものだが、『動物奇譚集』

は 800 話に及ぶ鳥獣魚のエピソードから、人間に智恵と徳性を教えるものである。

ルキアノス（120 頃―180 以後）は特別の存在である。シリアの生まれだが見事なギリシア語をあやつり、修辞学の素養の上に、あらゆる哲学学派、宗教家、歴史家、文学者を風刺してやまない。古代のヴォルテールと称されるのも故なしとしない。82 の作品のうち最も有名なのは、月世界旅行や鯨の胎内生活の話を含む『本当の話』であろうか。

ギリシア文学史最後のジャンルとして現われた古代小説については、もはや題名を掲げるだけにとどめなければならない。美しい男女が海賊にさらわれたり戦乱に巻きこまれたりして引き裂かれるが、波瀾万丈、大冒険の末にふたたび結ばれる。ワン・パターンという意味では古代におけるハーレクイン・ロマンのようなものと言えるかもしれない。カリトンの『カイレアスとカリロエ』（1 世紀？）、クセノポンの『アンテイアとハブロコメスのエペソス物語』（2 世紀初？）、アキレウス・タティオスの『レウキッペとクレイトポン』（2 世紀後半）、ロンゴスの『ダプニスとクロエ』（同じく）、ヘリオドロスの『テアゲネスとカリクレイア（エティオピア物語）』（3 または 4 世紀）、この 5 作がふつう古代恋愛小説として併称される。このうち『ダプニスとクロエ』はサン・ピエール『ポールとヴィルジニ』、ゲーテ『ヘルマンとドロテーア』、三島由紀夫『潮騒』などのモデルとなったことでも知られる。

しかし荒唐無稽な読み物となればこれだけにとどまらない。アレクサンドロス大王の死後、従軍史家により大王の正史が書かれたが、それとは別に民衆の間には『アレクサンダー伝奇物語』が形成され、

聖書に次いで多くの古代諸言語に翻訳されるほど愛好された。ピロストラトス（170 頃生まれ）の『テュアナのアポロニオス伝』は、奇蹟を行ないつつ東方へ旅する宗教者の物語である。

前 7 世紀から後 10 世紀に至る 300 人以上の詩人のエピグラム（短詩）4500 篇を集成した『ギリシア詞華集』も、逸してはならないギリシア文学の遺産である。

古代文学として扱う最後期にホメロスの残照が再現する。クイントス・スミュルナイオスの叙事詩『ホメロス後日譚』14 巻（3、4 世紀？）、トリピオドロスの『トロイア劫略』691 行（5 世紀）、コルトスの『ヘレネの誘拐』394 行（5 世紀）などである。そしてノンノスの『ディオニュソス譚』48 巻 2 万 4000 行（5 世紀）、その影響下に書かれたムサイオスの『ヘロとレアンドロス』343 行（5 世紀）と共にギリシア文学の古代は幕を閉じる。

中務 哲郎

補遺　邦訳と参考書

以上のようにごく大まかにギリシア文学史を辿ったのが 2000 年、それ以後、ギリシア文学作品の邦訳は格段に増えて、文中で言及した作品の多くが読めるようになっている。そこで補遺として、本文の記述に沿って邦訳を紹介し、併せて参考書にも触れておこう。西洋古典叢書の一冊として現れたものには刊行年のみ記し、他の書店から出たものには刊記を添えることにする。尚、著訳者名は敬称を略して記す。

叙事詩の分野では、中務哲郎訳『オデュッセイア』(2022 年) が出て、『イリアス』は佐野好則訳が準備中である。ホメロスについては松平千秋訳『イリアス』(岩波文庫、1992 年)、『オデュッセイア』(岩波文庫、1994 年) 初め先行訳が数種類あるが、中務訳は新しい試みとして同じ枕詞(エピセット)、同じ定型句(フォーミュラ)は同じ日本語に訳した。古代にはこの 2 作品以外にもホメロスに帰せられた作品が幾つもあり、またトロイア伝説圏の他にテーバイ伝説圏の叙事詩もあったが、いずれも散逸して断片しか伝わらない。そのようなものを集めたのが中務哲郎訳『ホメロス外典／叙事詩逸文集』(2020 年) である。ホメロスと詩聖の栄誉を争ったヘシオドスにも『神統記』『仕事と日』以外に『ヘラクレスの楯』や多くの断片があるが、中務哲郎訳『ヘシオドス　全作品』(2013 年) はそれらを一冊に纏めた。ホメロス風

を名乗る後代の詩人たちによる讃歌集は、沓掛良彦訳『ホメーロスの諸神讃歌』（平凡社、1990 年）で詳しい註と共に味わうことができる。

ホメロスについては浩瀚な研究書が現れている。川島重成・古澤ゆう子・小林薫編『ホメロス「イリアス」への招待』（ピナケス出版、2019 年）はホメロス問題、主題、人物像、さまざまなトピックについて 18 篇の論考を集めた論文集である。小川正廣著『ホメロスの逆襲　それは西洋の古典か』（名古屋大学出版会、2021 年）はオリエントからの影響を確認し、西洋ではホメロスはウェルギリウスの影に隠れた存在であったこと、そしてその復権をあとづけた大著である。川島重成著『ホメロス叙事詩の世界』（ピナケス出版、2023 年）は神々と人間、死生観、名誉観、『イリアス』と『オデュッセイア』の関係、等々、長年にわたる著者のホメロス解釈を集めたものである。西村賀子著『ホメロス「オデュッセイア」　〈戦争〉を後にした英雄の歌』（岩波書店、2012 年）は、戦争を後にして平和に向かう主人公という捉え方を提示する。他に西塔由貴子著『ホメロスと色彩』（京都大学学術出版会、2022年）は色彩の観点からもホメロス世界の豊かなことを描き出す。

抒情詩の分類については本文を振り返っていただきたいが、エレゲイア詩人の作品や断片を集めたものに西村賀子訳『テオグニス他エレゲイア詩集』（2015 年）がある。軍歌のテュルタイオス、憂愁の詩人ミムネルモス、政治思想のソロンなど 13 人、とりわけテオグニスは金言の宝庫である。独唱抒情詩ではサッポーが最も名高いが、これについては沓掛良彦著『サッフォー　詩と生涯』（平凡社、1988 年）が決定版と言ってよいであろう。訳に註解、詳しい評伝を

付す。合唱抒情詩では丹下和彦訳『アルクマン他　ギリシア合唱抒情詩集』(2002 年) がある。アルクマン、シモニデス、バッキュリデスなど 5 人、断片化が激しいが、抒情詩という言葉のイメージ以上に壮大で色彩豊かな詩世界がここにある。最大の合唱抒情詩人の全貌は内田次信訳『ピンダロス　祝勝歌集／断片選』(2001 年) で窺うことができる。晦渋をもって鳴るギリシア語を明晰な日本語に移してくれている。研究書としては安西眞著『ピンダロス研究 詩人と祝勝歌の話者』(北海道大学図書刊行会、2002 年)、小池登著『ピンダロス祝勝歌研究』(知泉書館、2010 年) がある。

抒情詩については無二の解説書がある。沓掛良彦著『ギリシアの抒情詩人たち』(京都大学学術出版会、2018 年) は最初の抒情詩人アルキロコスからアルカイオス、サッポー、アナクレオン、ピンダロス、ヘレニズム時代のカリマコスにテオクリトス、女流詩人たち、と説き及ばざるはなき周到な書である。著者はまた紀元前 7 世紀から後 10 世紀に至る 300 人以上の詩人の手になる 4500 篇のエピグラム詩を集成した『ギリシア詞華集』(2015-17 年) の邦訳を成し遂げているので、その偉業も紹介しておきたい。

三大悲劇詩人については、出版会としてはそれぞれ個人全訳を目指したが、まず丹下和彦訳『エウリピデス　悲劇全集』(全 5 冊、2012-16 年) が完成した。我が国のエウリピデス研究を代表する研究者による新訳である。訳者にはまた軽妙な近著、『ギリシア悲劇入門』(未知谷、2021 年)、『ギリシア悲劇の諸相』(未知谷、2023 年) がある。アイスキュロスについては西村太良訳、ソポクレスについては堀川宏訳が準備中である。悲劇の特殊研究として、吉武純夫著『ギリシア悲劇と「美しい死」』(名古屋大学出版会、2018 年) がある。

『ギリシア文明史』（人文書院、1973-75 年）の著者アンドレ・ボナールによると、最も翻訳が難しい作家はサッポー、ピンダロス、アリストパネスという。アリストパネスは読んでこれほど面白いものはないが、また訳出に困り果てることも多い。その第1分冊が2024年初めに戸部順一訳で出る予定である。新喜劇のメナンドロスについては、『ギリシア喜劇全集　5・6』（メナンドロス　I, II. 岩波書店、2009-10 年）が完全に近い作品から断片までの訳を収める。悲劇と喜劇のハンドブック的なものとして、『ギリシア悲劇全集　別巻（ギリシア悲劇案内）』（岩波書店、1992 年）と『ギリシア喜劇全集　別巻（ギリシア喜劇案内）』（岩波書店、2008 年）を挙げておこう。

ヘレニズム時代の文学は学匠詩人の活躍で特徴づけられる。堀川宏訳、アポロニオス・ロディオス『アルゴナウティカ』（2019 年）はアルゴー船に乗る 50 人の英雄の冒険譚であるが、これまで悲劇や喜劇では大人の恋や遊女の恋しか扱われなかったところ、本作において初めて、イアソンとメデイアという若者の恋が描かれた。もう一人の学匠詩人カリマコスについては、安村典子訳が準備中である。古澤ゆう子訳、テオクリトス『牧歌』（2004 年）はシケリア島からもたらされた新しいジャンルで、後代の牧歌（idyll）の祖となった作品の貴重な全訳である。訳者には『牧歌的エロース』（木魂社、1997 年）なる著書もある。

ローマ帝国治下のギリシア語圏で書かれた随筆の類は多いが、面白さでは柳沼重剛訳、アテナイオス『食卓の賢人たち』（全 5 冊、1997-2004 年）に敵うものはない。宴に集う知識人たちが食いものに関するあらゆる話題から酒席に付き物の性愛の話まで、蘊蓄を傾け長広舌を競い合う。失われた作品からの引用が夥しいことでも資料

的価値が高い奇書であるが、柳沼調の語り口の面白さも味わってほしい訳業である。この作品には抄訳版もある（岩波文庫、1992 年）。アイリアノスについては中務哲郎訳『動物奇譚集』（2017 年）が出た。鳥虫魚獣や架空の生物の話約 800 を収める。ポリュアイノス『戦術書』（戸部順一訳、1999 年）とアルテミドロス『夢判断の書』（城江良和訳、1994 年）は国文社の「叢書アレクサンドリア図書館」で読める。国文社は廃業したが、『夢判断の書』は白水社で復刊される。序でに記せば、同じ「叢書アレクサンドリア図書館」として出た伝カリステネス『アレクサンドロス大王物語』（橋本隆夫訳、2000 年）はちくま学芸文庫で復刊され、ヘリオドロス『エティオピア物語』（下田立行訳、2003 年）も岩波文庫に入ることになっている。数々の西洋古典を出してくれた国文社への感謝から特に記しておきたい。

2 世紀に活躍したルキアノスは修辞家などと呼ばれることが多いが、もはや（現代の意味での）小説家と呼ぶべきかと思う。これまでにも部分的な翻訳は何度か現れたが、出版会では 8 分冊で全 82 作品を訳出する予定で、既に内田次信・戸高和弘・渡辺浩司訳『全集 4　偽預言者アレクサンドロス』(2013 年)、丹下和彦訳『全集 3　食客』(2014 年)、内田次信・西井奨訳『全集 8　遊女たちの対話』(2021 年）が出て、内田次信・戸高和弘訳『全集 6　ペレグリノスの最期』が近刊の予定である。

これとは別に「古代小説」と呼ばれる独特の作品群があり、ラテン語作品ではペトロニウス『サテュリコン』、アプレイウス『黄金のろば（変身物語）』、『テュロスのアポロニウス王物語』等があり、ギリシア語によるものは 5 作品が残っている。この中、出版会から

刊行したのは中谷彩一郎訳、アキレウス・タティオス『レウキッペとクレイトポン』(2008 年) のみであるが、同じ訳者によるロンゴス『ダフニスとクロエ』も訳稿がある。しかし中谷彩一郎は著書『ダフニスとクロエの世界像』(慶應義塾大学教養研究センター選書、2022 年) を遺して、惜しくもベルギーに客死したため、勝又泰洋が編集刊行の責を負うことになった。ロンゴスには呉茂一訳 (角川文庫、1951 年)、松平千秋訳 (岩波文庫、1987 年) もあるが、他の 3 作品については、丹下和彦訳、カリトン『カイレアスとカッリロエ』(国文社、1998 年)、松平千秋訳、エペソスのクセノポン『エペソス物語』(筑摩書房世界文学大系「古代文学集」、1961 年)、下田立行訳、ヘリオドロス『エティオピア物語』(国文社、2003 年。岩波文庫に入る予定) で読むことができる。古代小説の概説としては、中務哲郎「物語から小説へ」(岩波講座「文学 3　物語から小説へ」、2002 年) がある。

ギリシア文学はホメロスの二大叙事詩をもって始まるが、その終焉期を画するのもやはりホメロスの影である。『イリアス』と『オデュッセイア』の他に 6 つの散逸叙事詩がトロイア伝説圏を形成していたことが知られるが、そこに描かれたエピソードを組み合わせて作られたのが、北見紀子訳、クイントス・スミュルナイオス『ホメロス後日譚』である。更に遅れて現れるのが、5 世紀のノンノス『ディオニュソス譚』で、酒神ディオニュソスの事績を歌ったギリシア文学最長の詩ということ以外、これについて知る人は少ないが、吉武純夫による翻訳が計画されている。ノンノスの詩句の影響下に書かれた小叙事詩、ムーサイオス『ヘーローとレアンドロス』には中務哲郎訳がある (岩波文庫『ギリシア恋愛小曲集』、2004 年)。

「ギリシア文学の流れ」では触れられなかったことだが、ホメロス研究は既に古代に始まっており、ヘレニズム時代アレクサンドリアの文献学者の貢献は計り知れない意義を持つ。しかしそれ以外にも、文人がホメロスを材料に評論的述作をものすることが次第に多くなる。そのようなものの紹介として、内田次信訳、ディオン・クリュソストモス『弁論集 2　トロイア陥落せず』(2012 年) と同じ訳者によるプルタルコス／ヘラクレイトス『古代ホメロス論集』(2013 年) を挙げておきたい。前者は「黄金の口」と渾名される弁論家が、『イリアス』に見える不合理や矛盾を批判して、『イリアス』の作り替えを行う面白い作品である。後者は有名なプルタルコスのホメロス論と、ヘラクレイトス (不明の作家) に始まるホメロスの寓意的解釈を紹介して、研究史的意義が深い。

ギリシア文学史としては、細井敦子／秋山学訳、ジャクリーヌ・ド・ロミイ『ギリシア文学概説』(法政大学出版局、1998 年)、逸身喜一郎著『ギリシャ・ラテン文学　韻文の系譜をたどる 15 章』(研究社、2018 年) を薦めたい。

2023 年 9 月

中務 哲郎

ラテン文学総説

ラテン文学が最も華々しい光彩を放ったのは前 1 世紀のほぼ 100 年間である。この 100 年はまた文学史上、キケロが没した前 43 年を境として、以前を共和政末期、以後、アウグストゥス帝が病死する後 14 年までを黄金時代と呼んで区分される。この最盛期に先立つ時代は初期ラテンとして一括して扱われる一方、黄金時代に続くのは白銀時代（マルクス・アウレリウス帝の治世の終わる 180 年まで）、次いで、キリスト教期（西ローマ帝国滅亡の 476 年まで）である。

初期ラテン文学はギリシア文学の偉大な伝統をローマの土壌に移植し根づかせようとする時代であった。まず、ギリシア植民市タレントゥム出身のギリシア人リウィウス・アンドロニクス（前 284―204）がホメロスの叙事詩『オデュッセイア』やギリシア劇をラテン語に翻訳または翻案してその後の発展の基礎を築くと、次いでナエウィウス（前 270 頃―200 頃）は悲劇、喜劇、叙事詩のほかにローマの歴史的事件を題材とするプラエテクスタ劇を創始した。彼らの韻律面の基礎がローマ古来のサトゥルニウス詩形によっていたのに対し、エンニウス（前 239―169）の代表作でローマ建国以来の歴史を歌う『年代記』にはギリシア叙事詩の韻律であるヘクサトメロスが用いられた。

これら初期ラテンの作品のほとんどが断片でしか伝わらないのに

対し、プラウトゥス（前 254 頃―184）とテレンティウス（前 190 頃―159）による喜劇のみはまとまった作品として伝存（前者 21 篇、後者 6 篇）し、質的にも完成された域を示している。二人の喜劇はいずれもギリシア新喜劇の原作を翻案して書かれたが、その作風は好対照をなす。観客を楽しませるために賑やかで動きのある場面を作り出そうとしたプラウトゥスに対し、テレンティウスは整った筋の展開に重きを置いた。

また、ローマ独自のジャンルとして風刺詩がルキリウス（前 180 頃―102 頃）の手により成立する。彼はヘクサメトロスを風刺詩の韻律として定着させた。

共和政末期にはカエサル、サルスティウス、ネポスによる歴史作品とともにウァロ（前 116―27）とキケロ（前 106―43）の著述によってラテン語散文の文体と修辞が一つの頂点に到達する。

ウァロの著作として伝存するのは『農業論』と『ラテン語考』のみであるが、その百科全書的教養主義は同時代のキケロから後世の文人たちに広く影響を与えた。

ローマ共和政を体現した文人キケロの著作は演説、修辞学書、哲学書、書簡に大別される。演説では『カティリナ弾劾』『ウェレス弾劾』『カエリウス弁護』『ムレナ弁護』など 58 篇が伝存し、雄弁と機知の輝きを見せる。修辞学書は『雄弁家論』『ブルトゥス』『雄弁家』など 7 篇で自由人の徳としての雄弁の必要性とその修養を説く。哲学書は『国家について』『法律について』『トゥスクルム荘対談集』『義務について』など、キケロが摂取したギリシア哲学をキケロ自身の言葉で伝えている。また、『アッティクス宛書簡集』など返信も含めて 900 余通の書簡は、私人キケロの素顔を窺わせる。

こうしたラテン散文の隆盛の一方、韻文においても前2世紀末から新詩人と呼ばれる人々によりヘレニズム文学に倣った詩作が盛んになる。この流れをカトゥルス（前84頃―54頃）がローマの土壌に定着させた。彼は恋人レスビアを歌う恋愛抒情詩のほか、神話を題材とする小叙事詩、あるいはエピグラムや祝婚歌に機知や学識を織り込み、洗練された技巧によって歌った。

黄金時代にはラテン文学を代表する詩人たちが次々と現われる。その華やかな隆盛の下地は一方では共和政末期からのヘレニズム文学の吸収であり、他方では、アウグストゥスにより「ローマの平和」が確立された中でマエケナスやメッサラといった有力者がパトロンとして詩人たちを支えたことであった。詩人たちは洗練された技巧に裏打ちされた自分自身の表現力を手に入れる一方、内乱の間の辛い経験と為政者側からの現体制称揚の要請との強い影響下に、生きるとはどういうことか、ローマないしローマ人とは何かといった真摯な問いを詩作の中心に据えた。

そうした問いかけを正面から突きつけているのがウェルギリウス（前70―19）である。最初の詩集『牧歌』はテオクリトスに、第2作『農耕詩』はヘシオドスの『仕事と日』に、遺作『アエネイス』はホメロスの両叙事詩『イリアス』と『オデュッセイア』に、というようにいずれもギリシア文学の伝統に範を求めた。が、『牧歌』では自然の理想郷を舞台に内乱が引き起こした田園の荒廃、『農耕詩』ではイタリアの農村賛美とともに文明と自然の衝突、『アエネイス』ではローマ建国という社会的使命を背負った英雄像を描いた。それはギリシアの「模倣」を超えた、真に「ローマの詩」として誇りうるものであった。

ウェルギリウスが一貫してヘクサメトロスによる詩作でローマの社会に目を向けていたとすれば、ホラティウス（前 65―8）の詩作は多様な韻律とそれに呼応して変化する詩想により元首政のもとでの個人の自由を歌った。ヘクサメトロスを用いては『風刺詩』によりルキリウスの創始したジャンルを洗練させるとともに、『書簡詩』という新しい様式を生み出して自由人あるいは詩人のあり方を皮肉に綴って見せる一方、『エポディ』『歌章』においてはアルキロコス風、サッポー風、アルカイオス風など抒情詩の韻律を駆使して人生のさまざまな側面を映し出した。また、『書簡詩』第 2 巻第 3 歌はとくに『詩論』として後世の文芸批評に多大な影響を与えた。

ウェルギリウスとホラティウスが黄金時代の王道を歩いた双璧とすると、言ってみれば、私道に進むべき道を見出したのが恋愛エレゲイア詩人たちである。恋愛エレゲイア詩はガルス（前 70／69―27／6、作品は数行の断片のみ伝存）により創始され、ティブルス（前 55 頃―19）とプロペルティウス（前 50 頃―16 頃）により確立されたローマ独自のジャンルである。彼らは主観的文体と呼ばれる詩人の一人称叙述の中に、武勇、名声、富などを尊ぶ世間的な価値観に抗して、惰弱で恥辱的でも戦争や欺瞞や貪欲を排する恋愛を自分独自の人生として提示した。

黄金時代の最後に登場するオウィディウス（前 43―後 17 頃）は、先輩詩人たちの築き上げた伝統に依拠しつつ軽みと機知で仕上げる、マンネリズムとパロディーの詩作を特色とした。恋愛エレゲイア詩から出発した『恋の歌』『名高き女たちの手紙』『恋愛術』『恋愛治療』などに続いて、ギリシア神話を題材とする叙事詩『変身物語』と、ローマの祝祭・故事を暦に従って綴る『祭暦』の二大作、

そして、後8年に追放に処せられてのちの悲しみ、赦免への懇願を歌った『悲しみの歌』『黒海からの手紙』を残した。

白銀時代には黄金時代の光彩は薄れたものの、なおさまざまなジャンルに多彩な文学活動が展開された。ローマ帝国が版図を拡大したこの時期、スペイン（二人のセネカ、ルカヌス、マルティアリス、クインティリアヌスなど）やアフリカ（アプレイウスなど）出身の作家も現われる。が、文芸活動の表舞台はあくまでローマでありつづけた。

悲劇ではセネカ（小セネカ、前4項―後65）による10篇が伝存する。後世に多大な影響を残した彼の作品はギリシア悲劇をモデルにしながら、過剰なほどの修辞技巧を駆使した。

叙事詩では、ルカヌス（後39―65）による前1世紀の内乱に取材した『内乱』、ウァレリウス・フラックス（後93頃没）による『アルゴナウティカ』、シリウス・イタリクス（後25頃―101頃）による『ポエニ戦記』、スタティウス（後45頃―96頃）による『テーバイ物語』と『アキレウス物語』がある。

風刺詩ではペルシウス（後34―62）につづいてユウェナリス（後2世紀初頭に活動）が現われる一方、マルティアリス（後40頃―104頃）により寸鉄詩が記され、いずれも時代の愚行を辛辣に描き出し、白銀時代の文学として最も異彩を放った。

白銀時代のもう一つの華は小説で、ペトロニウス（後1世紀中頃）作『サテュリコン』とアプレイウス（125年頃生）作『変身物語』（通称『黄金のロバ』）を挙げることができる。

このほか、パエドルス（前18頃―後55頃）は『アイソポス風寓話集』により寓話を韻文で綴り、伝ヒュギヌス作（おそらく後2世紀）の『神話伝説集』はギリシア神話の手引き書の体裁をとった。大セネカ（前

50 頃―後 40 頃）が『仮想演説集』を残した一方、クインティリアヌス（後 35 頃―100 頃）は『弁論家の教育』で古典教育における弁論の重要性を説き、タキトゥス（後 56 頃―120 以前）は歴史作品のほかに『弁論家に関する対話』を著わした。また、小プリニウス（後 61／2―113 頃）がトラヤヌス帝を含む友人との間に交わした『書簡集』、ゲリウス（125 頃生）による多様な話題を盛った随筆集『アッティカの夜』が出版された。

後 3 世紀以降、キリスト教がローマ帝国内に地歩を築く一方で伝統的ラテン文学は衰退に向かう。創造的な文筆活動はテルトゥリアヌス（160 頃―220 以降）、ラクタンティウス（240 頃―320 頃）、アンブロシウス（334 ―397）、ヒエロニュムス（347―420）ら教父たちの手に移る。その中で、『婚礼継ぎはぎ歌』『歴代皇帝』など趣向豊かな作品を生んだアウソニウス（310 頃―393／4）、叙事詩『プロセルピナの誘拐』を残したクラウディアヌス（370 頃―404 頃）、また、キリスト教の教義を古典の教養と融合させラテン詩の韻律にのせたプルデンティウス（348―405 以降）、さらに、作者不詳ながら愛と生命の力を謳歌する『ウェヌスの宵宮』、これらにラテン文学最後の花を見ることができる。

高橋 宏幸

作家名、作品名表記の補正

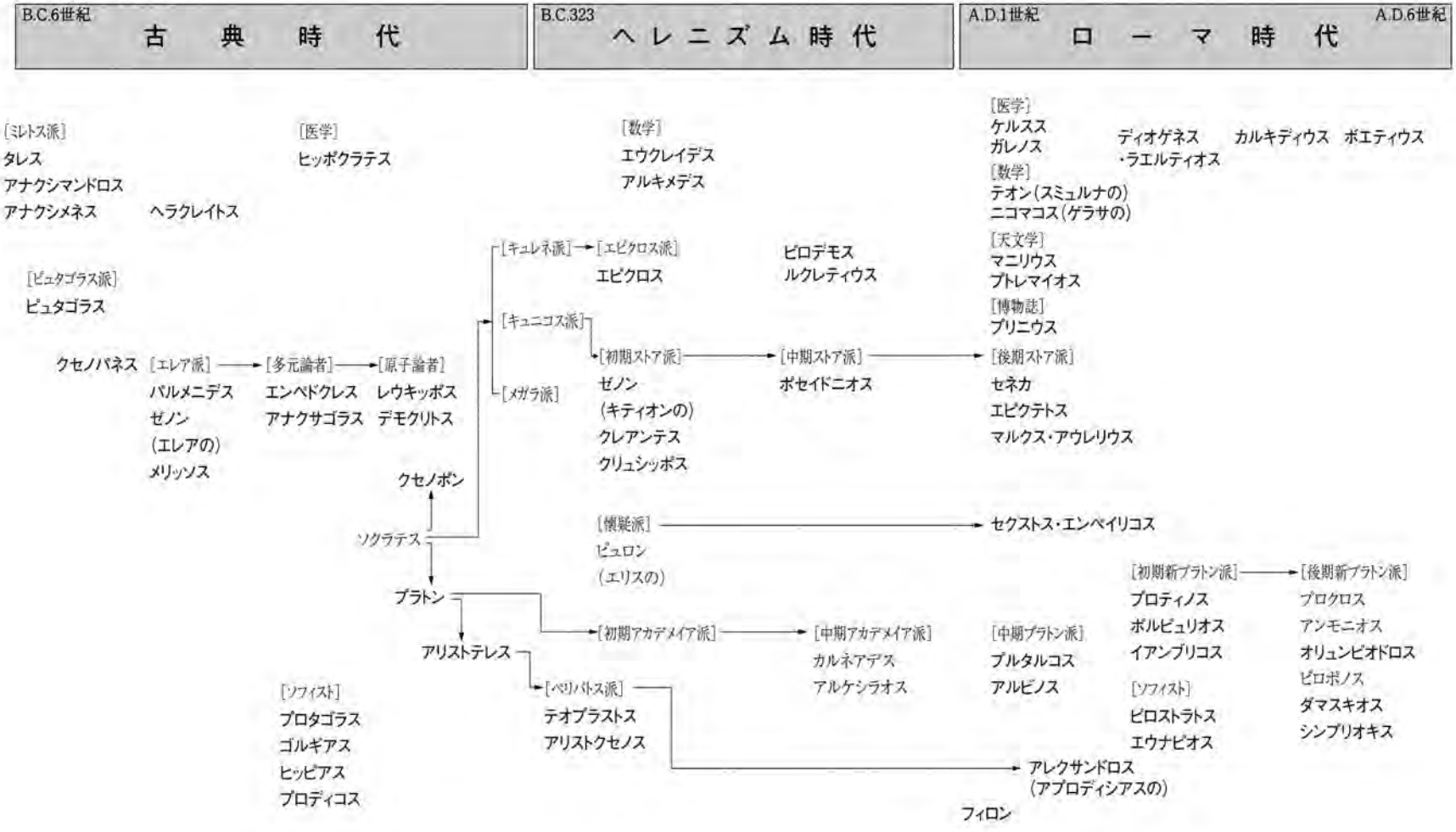
上掲「ラテン文学総説」は西洋古典叢書創刊後まもなく、そのときに叢書の基本方針としていた固有名詞等について音引きを行なわない、流音が重なる場合に「ッ」を入れないなどの表記の仕方をとって書かれている。ところが、その後、方針が変わり、表記法については訳者の意向によることとなった。加えて、邦題についても当初の予定から変更することもあり、そのため、実際の刊行書目での作家名、作品名とのあいだに齟齬が生じている場合がある。以下はその補正である。

『アエネイス』　→　『アエネーイス』
（オウィディウス）『恋愛術』　→　『恋の技術』
（オウィディウス）『恋愛治療』　→　『恋の病の治療』
シリウス・イタリクス『ポエニ戦記』　→　シーリウス・イタリクス『ポエニー戦争の歌』
伝ヒュギヌス　→　ヒュギヌス
ゲリウス　→　アウルス・ゲッリウス

2023 年 9 月
高橋 宏幸

西洋古典の系譜

●哲学・科学



＊ゴチック体の名前は本叢書でとりあげる著作家であることを示す。

●歴史・地理

	B.C.5世紀 古典時代	B.C.323 ヘレニズム時代	A.D.1世紀 ローマ時代	A.D.5世紀
［ギリシア語史書］	ヘロドトス トゥキュディデス　テオポンポス クセノポン クテシアス	ティマイオス ポリュビオス ディオドロス（シチリアの） ディオニュシオス（ハリカルナッソスの） マネトン ベロッソス	プルタルコス アリアノス アッピアノス ヨセフス ディオン・カッシオス ヘロディアノス	エウセビオス プロコピオス［6世紀］
［ラテン語史書］		カエサル サルスティウス ネポス 大カトー　ウァロ トログス	リウィウス クルティウス・ルフス ウェレイユス・パテルクルス タキトゥス スエトニウス フロルス アンミアヌス・マルケリヌス シュンマクス	（『ローマ皇帝群像（ヒストリア・アウグスタ）』）
［地理書その他］	アイネイアス・タクティコス	ストラボン ウィトルウィウス コルメラ フロンティヌス パウサニアス フロント		

●ギリシア文学

	B.C.8世紀 古典時代			B.C.323 ヘレニズム時代		A.D.1世紀 ローマ時代				A.D.5世紀
[叙事詩]	ホメロス ヘシオドス			アラトス アポロニオス・ロディオス	ニカンドロス	オッピアノス	クイントス・スミュルナイオス			ノンノス
[抒情詩]	アルキロコス アルカイオス サッポー アルクマン	ピンダロス テオグニス		カリマコス テオクリトス						
[劇]			アイスキュロス ソポクレス エウリピデス アリストパネス	ヘロンダス メナンドロス						
[散文]			クセノポン プラトン アリストテレス	パライパトス	カリトン	ヘラクレイトス コルヌトゥス プルタルコス バブリオス アポロドロス アキレウス・タティオス	アルキプロン ケベス ルキアノス アテナイオス クセノポン(エペソスの)	ピロストラトス アイリアノス ロンゴス ヘリオドロス	ユリアノス	
[弁論]			アンティポン リュシアス アンドキデス イソクラテス	デモステネス アイスキネス デメトリオス	ディオニュシオス(ハリカルナッソスの)	ロンギノス	ディオン・クリュソストモス アリステイデス		リバニオス	

●ラテン文学

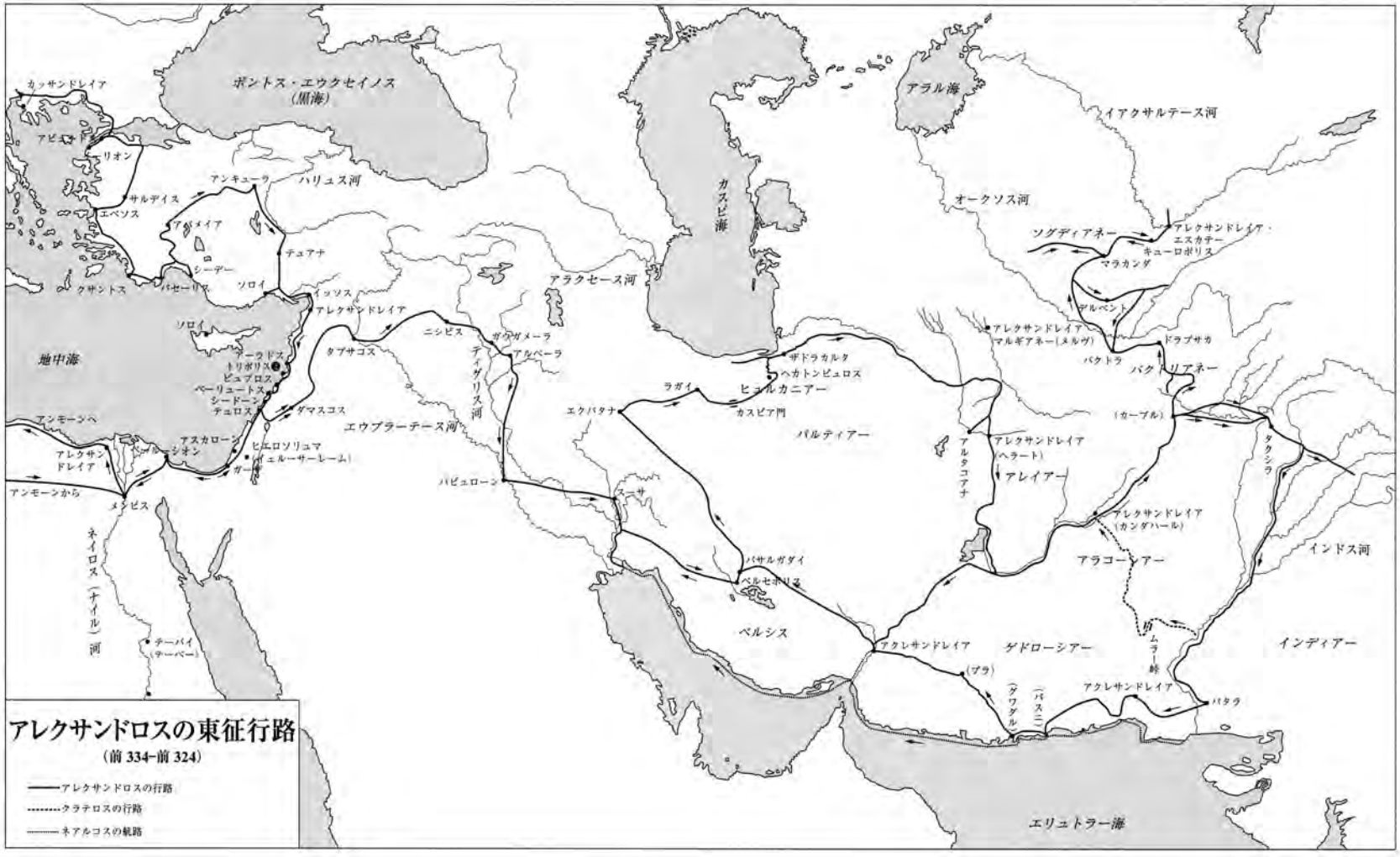
	B.C.300 ヘレニズム時代			A.D.1世紀 ローマ時代		A.D.5世紀
	（初期）	（共和政末期）	（黄金期）	（白銀時代）		（キリスト教期）
［叙事詩］	エンニウス	ルクレティウス	ウェルギリウス	ルカヌス ウァレリウス・フラックス シリウス・イタリクス スタティウス		クラウディアヌス プルデンティウス
［その他詩］		カトゥルス	ホラティウス ティブルス プロペルティウス オウィディウス	ペルシウス ユウェナリス マルティアリス		アウソニウス シドニウス・アポリナリス
［劇］	プラウトゥス カエキリウス テレンティウス		プブリリウス・シュルス	大セネカ セネカ		
［散文］	大カトー	キケロ カエサル ウァロ		パエドルス ウァレリウス・マクシムス ペトロニウス クインティリアヌス 小プリニウス　アプレイウス ゲッリウス ヒュギヌス		マクロビウス

関連地図

黒　海
トラキア
ストリュモン川
マケドニア
アブデラ
プロポンティス
タソス島
ピエリア
オリュンポス
ペネイオス川
ドドナ
テッサリア
マグネシア
ペリオン
イオルコス
ペライ
アケロオス川
アカイア・プティオティス
トラキス
エウボイア
ロクリス
カルナニア
アイトリア
タポス島
オイノエ
カリュドン
イタケ
キュメ
カルキス
エウリポス海峡
ボイオティア
オルコメノス
カイロネイア
アスクラ
テスピアイ
オノス
アカイア
メガラ
エレウシス
アテナイ
ピュタゴラス
シキュオン
コリントス
サラミス
キュレネ
ネメア
ミュケナイ
ピサ
オリュンピア
アルゴリス
アルゴス
アイギナ
テゲア
エピダウロス
トロイゼン
ペルシオネ
アルカディア
アルペイオス川
アイリュンス
メッセニア
スパルタ
ピュロス
ラコニア
キュテラ島
トロイア
スカマンドロス川
レムノス島
ミュシア
イダ
アドラミュッティオン
メテュムナ
レスボス島
イオニア
グリュネイア
ヘルモス川
キオス島
テオス
コロポン
マイアンドロス川
ミレトス
カリア
デロス
ナクソス島
コス島
ロドス島
クレタ
イダ
クノッソス
リュクトス

ギリシア世界

アルペース山脈
ベーナークス湖
コームム
エポレディア
ウエルセッラエ
メディオラーヌム
ブリクシア
ウェローナ
ポストゥミウス街道
パタヴィウム
フォルム・ユーリイー
コンコルディア
アクィレイヤ
アルティーヌム
イストリア
アウグスタ・タウリーノールム
クレモーナ
マントゥア
ベードリアクム
パドゥス湖
クラスティディウム
ブラケンティア
ポッレンティア
アルバ・ポンペイア
アエミリウス街道
ゲヌア
ボノーニア
ラウェンナ
ルーナ
ルーカ
ピーサエ
ファエスラエ
カッシウス街道
アリーミヌム
ファーヌム・フォルトゥーナエ
アンコーン
アウクシムム
フラミニウス街道
アッレーティウム
イーグウィウム
コルトーナ
ヌーケリア
アシーシウム
アーヌクルム
イルウァ
コルシカ
ルーシウム
サートゥルニア
スポレーティウム
カストルム・ノウム
ウェトゥローニア
ウルシニイー
インテラムナ
ウォルシニイー湖
フェントゥイウム
ウィア・ラティナ
ウィア・ウァレリア
ウァレリウス街道
クレース
ティベリス
アミテルヌム
タルクイニイー
ウェイイー
アルバーケーンブ
カペーナ
コーンファニウム
カルセオリ
ピュルギー
ウエレ
アルシウム
ローマ
アラリアー
オースティア
トゥスクルム
ソーラ
アエセルニア
シーポンティウム
フレゲッラエ
ルーケリア
アルデア
アンティウム
キルケイイー
スエッサ・アウルンカ
ベネウェントゥム
アースクルム
カンナエ
カヌシウム
サントゥルナエ
カーイエーター
アエクラーヌム
フォルミアエ
カプア
アペッラ
アグローニア
ウェヌシア
リーテルヌム
クーマエ
ノーラ
ネアポリス
コンプサ
アッピウス街道
タラース（タレントゥム）
ブルンディシウム
プテオリー
ポセイドーニアー（パエストゥム）
メタポンティオン
エレアー
ヘーラクレイア
ラクセントゥム
ポピリウス街道
シュバリス
クラーティス河
トゥーリオイ
イアーピュギアー
ロークリー・エペゼピュリオイ
クロトーン
テメセー
スキュラケーウム
ウィポー
カウローニアー
アエオリアエ群島
ザンクレー（メッサーナ）
レーギオン
ヒュッカラ
ビュルモス
ドレパノン
エリュクス山
リリュバイオン
アエガーテース諸島
アイトネー（エトナ）山
タウロメニオン
アドラーノン
ヘンナ
ケントリパ
大ヒュブラー
カタネー
セリーヌース
ヘーラクレイア
アクラガース（アグリゲントゥム）
エクノモス岬
レオンティーノイ
ゲラー
ヒュブラー・ヘーライア
カマリーナ
シュラークーサイ
カルターゴー
イタリア全土
シケリアー


アレクサンドロスの東征行路
（前 334–前 324）
アレクサンドロスの行路
クラテロスの行路
ネアルコスの航路
ポントス・エウクセイノス（黒海）
カスピ海
アラル海
イアクサルテース河
オクソス河
ハリュス河
アラクセース河
エウプラーテース河
ティグリス河
インダス河
地中海
エリュトラー海
インディアー
アラコーシアー
ゲドローシアー
パルティアー
ヒュルカニアー
アレイアー
バクトリアネー
ソグディアネー
ベルシス
カッサンドレイア
アビュドス
リオン
サルデイス
エペソス
アンキューラ
パタラ
クサントス
ソロイ
イッソス
アレクサンドレイア
ニシビス
ザウガメーラ
アルベーラ
タプサコス
ダマスコス
アスカローン
ペルーシオン
ガザ
メンピス
ネイロス（ナイル）河
テーバイ（テーバー）
ラガイ
エクバタナ
ザドラカルタ
ヘカトンピュロス
カスピア門
スーサ
パサルガダイ
ペルセポリス
アレクサンドレイア（ヘラート）
アルタコアナ
アレクサンドレイア（カンダハール）
ドラプサカ
（カーブル）
タクシラ
ムラー峠
アレクサンドレイア
（プラ）
（アワタル）
（パスニ）
パタラ
アレクサンドレイア・エスカテー・キューロポリス
マラカンダ
ザルベント
アレクサンドレイア・マルギアネー（メルヴ）
バクトラ

ポントス・エウクセイノス(黒海)
トラーケー
ポントス
シノーペー
ペリントス
ビューザンティオン
カルケードーン
ヘーラクレイア
アミーソス
サモトラーケー
アイノス
アスタコス
ミュソス山
パープラゴニアー
ハリュス河
ランプサコス
キュージコス
アビュードス
ビーテューニアー
ガラティアー
イーリオン
スケプシス
ミューシアー
ゴルディオン
カッパドキアー
ペルガモン
プリュギアー
レスボス
キュメー
リューディアー
スミュルナ
サルデイス
マイアンドロス河
クラゾメナイ
テオース
コロポーン
エペソス
トラッレイス
サモス
プリエーネー
ピュッラ
ミーレートス
リュカーオニアー
キュドノス河
ピシディアー
カーリアー
ハリカルナッソス
パンピューリアー
ペルゲー
アスペンドス
コース
キリキアー
タルソス
クニドス
シーデー
エーリューソス
リュキアー
パセーリス
カメイロス
リンドス
ロドス
アンティオケイア
シュリアー
オロンテース河
サラミース
キティオン
アマトゥース
パポス
キュプロス
ポイニーケー
小アジア

編集の辞

創刊～第Ⅳ期

大事業に着手する機、ようやく熟す

編集委員代表・京都大学名誉教授*　藤澤 令夫

日本は十九世紀の半ばから、長年の鎖国を解いて、西洋文明を積極的に受け入れはじめた。受容の姿勢は総じて「和魂洋才」、学問については「実学」の思想、掛声としては「富国強兵」であった。すなわち、日本古来の「魂」を恃みとして、西洋の学問と文明からは、国力増強に役立つ実益的なその先端部分を集中的に輸入する、ということである。

影響は後のちまで尾を引いた。学問分野では当然、理工系が法科経済と共に重んじられ。文学部系の洋学は、“虚学”として冷遇されることになる。そしてその虚学のうちでも、実に哲学においてさえ、最先端至上主義が幅をきかせてきた。

だがいうまでもなく、西洋の学問と文明はただ「才」としてあるのではなく、その長い伝統を培ってきた母体（マトリックス）があり、「魂」がある。その具体的な姿がギリシア・ローマの古典であって、わが国において和漢の古典籍がそうであったように、西洋の伝統においてこれらの古典は、知と教養の源泉でありつづけたのである。

けれども西洋文明受容の基本姿勢が上述のごとくであった以上、これと取り組むだけの本格的な力量は、わが国では容易には育ま

* 肩書きは執筆当時。以下同。

れず、一部は邦訳されたが、膨大にして多種多様なギリシア・ローマの古典の大部分は、まだ手つかずのまま残されている。

いまやしかし、こうした点の反省の上に立つ「日本西洋古典学会」の創設からも半世紀近く経ち、大学におけるこの道の教育と研究の進展と相まって、哲・史・文にわたる西洋古典の各領域に習熟した研究者層の厚さ広さは、昔日の比ではない。ギリシア語とラテン語で書かれたその原典の全部を、正確で平明な日本語に翻訳し公刊するという大事業に着手する機が、ようやく熟したといえるだろう。

幕末・明治から150年、「西洋」摂取の戦略によって日本は急速に近代化を達成し、大戦で叩かれた後は、「強兵」を諦めてもっぱら「富国」への道を邁進してきた。今日、かつての「和魂」は消散したかに見え、他方「洋学」としての科学技術文明は、その恩恵の反面、さまざまの深刻な負の波及効果を顕在化させている。この状況の中でいまこそわれわれは、ここに初めて西洋の知と教養の巨大な全容を読者に提供するべく蓄積された学会の総力を傾けて、息の長い努力をつづけていくつもりである。

東西文明の接点に立つ日本人にとってこそ！

編集委員・京都女子大学教授　藤縄 謙三

古代のギリシア人とローマ人が後世に遺した古典は、ホメロスの生気あふれる英雄叙事詩に始まり、自然研究をも含めて、あら

ゆる分野の学芸を開花させた上で、次第に衰微し、ローマ帝国末期にキリスト教的著作へと移行して終わる。今日の日本人の立場から見ても、これらの古典の全体は、比類なく充実した一つの文明圏の歴史の多面的な記録として、絶対的な価値を有しており、これを欠いては、世界史の中心部分が崩れてしまうだろう。

狭義での歴史記録はヘロドトスとトゥキュディデスによって始められ、それ以来、同時代史記述は連綿として続けられたが、それ以外にも直接に歴史に関係する種々の著作がある。たとえば、弁論術の盛時には、その時の必要に応じて政治や裁判の演説が執筆され、それらは単なる実用の枠を超えて、文学作品として保存されてきた。普通の史書に加えて、これらの弁論などをも読めば、遠い昔の歴史を追体験することができる。

さらに進んでは、多種多様な古典の中からたとえば文明の盛衰の原因などを探り出すことも可能であろう。現代文明が行き詰まりつつあるとき、自身の切実な問題を意識しながら、しかも東洋人または日本人として読むならば、古めかしい古典の中にも必ずや新しい意味を発見するはずである。東洋の古典にも深遠な真理は含まれており、そこから私たちは欧米人とは異なる思考力を養育されているからである。

東洋の古典は、概して視野が狭く、表現は暗示的で、物事を明確に語ってくれない。それに対して西洋の古典は叙述が精細で、論理も明晰であるから、幸いなことに日本語などへも正確に翻訳することが出来る。それだけ普遍性を帯びているわけであり、世界の問題を直視し、根本から解明するための基盤や素養は、何よりも、これらの泰西の古典を読むことによって得られるように思

われる。とりわけ東西文明の接点に立つ日本人にとって。

古典の普遍の価値に照らし、「人間」を問う

編集委員・姫路獨協大学教授　岡　道男

およそ文学は世界における人間のあり方を問うものであるが、古代ギリシア・ローマの詩人、作家たちは、一方の対極に「不死」である神を据え、他方の対極に「死すべきもの」である人間を置くという、きわめて先鋭的な形でこの問題の解決をもとめ、人間の本質をえぐり出すことに成功した。世界文学において、自由、秩序、調和、フーマーニタース（人間であること、品位）などの理念がかれらによってはじめて明確に捉えられたのはけっして偶然ではない。ギリシア・ラテン文学がルネッサンスにおいて人間を中世以来の様々な抑圧から解放して近代・現代ヨーロッパ文学の成立、ひいてはヨーロッパ精神の形成にみちびき、今なお「古典文学」として尊ばれ、人間形成のための規範として仰がれるのも、それが普遍的理念を体現する人間像を呈示しているからである。

この人間像は、言語の彫琢と文学形式の探求によって驚嘆すべき芸術的完成に到達した。そこには、一時的なものと永遠なものを見分け、本質的なものをできるかぎり的確に捉えて表現しようとする、倦むことのない努力が見られる。後代の文学において模範とされた、叙事詩、叙情詩、ドラマ（悲劇、喜劇）、小説（ロマ

めるのだ」という端的な石が共有されていることが、末席に連なっていたわたしにも強く感じられた。

以来6年半を経て、第Ⅰ期15冊、第Ⅱ期31冊がほぼ予定通りに刊行された。当初一つの通過目標として意識された通巻50冊は目前である。まずは無事に企画の歩みを安定させるところまではきた、ということができよう。引き続き、来年早々には第Ⅲ期22冊の刊行が開始される。ここに至るまでにも、邦訳担当者、出版会スタッフをはじめとする関係者の熱意と努力は、むろん並大抵ではなかった。もとより、この出版を支持し息長く購読をつづけてくださっている方々の存在なくしては、ここまでの持続は不可能であったこと自明である。

しかし、計画の膨大さは今ごろやっと実感できるようになったところでもある。既刊46冊には、すでに西洋古典のもつ力の大きさと手応えの重さが十分に示されていようが、実は、これはまだ全容のわずかな一端でしかない。これまでこの叢書は、我が国での古典作品の全般的な邦訳状況との相補性を考慮に入れながら、出版書目の編成を図ってきた結果、本邦初訳作品、既訳があっても入手しにくいものなどに重点を置いてきた。第Ⅲ期もなお同様のコンセプトを基調としており、初訳の重要作品が大半である。そのためでもあるが、ここにはまだホメロスもギリシア悲劇詩人たちも、あるいはキケロもホラティウスも、またその数え上げきれないほどに多くの著名な著作家や彼らの作品が見当たらないままである。言うまでもなく、いまだ広く知られていない著作家による貴重な作品はさらに多い。ここにきて、西洋古典という大樹海の延々たる広がりを、改めて思い知らされるばかりである。な

ンス）、風刺詩、恋愛詩などの文体の形式の確立もまた、そのような努力の結実であった。

古典古代の文学は、二千数百年の歳月を経た今日においてなお、汲めども尽きぬ泉のように新しい生命に満ちあふれている。本叢書が現存のギリシア・ローマの文学作品をもっとも信頼できるテクストにもとづいて平易な現代語に翻訳し、広く読者に提供するのも、価値の変動のはげしい現代において、人間とは何かという問題を古典の不変の価値に照らして改めて考えるきっかけとなれば、との願いからにほかならない。

第Ⅲ期 編集の辞 *2004*

『西洋古典叢書』第Ⅲ期刊行に向けて

編集委員・京都大学教授　内山 勝利

古代ギリシア・ローマ古典を余さず邦訳刊行することを最終的な目標として、この叢書の第１冊目が出されたのは1997年の春だった。これが途方もない企てであることは誰の目にも明らかであろう。中心的な推進役の藤澤令夫先生、故・藤縄謙三先生、故・岡道男先生にはむしろ一入危惧の念があったにちがいないが、大事業への着手にしては、編集委員会などもごく淡々と進められていくのがかえって印象的だった、しかし「なすべきことだから始

おしばらくは、この（魅力に満ちた）深い森の中へとひたすら突き進むしかあるまい。やがて壮大な眺望の開けるところまで、皆さまからの変わらぬご支持とご支援をいただけますよう、念じてやみません。

第Ⅳ期刊行に向けて *2007*

痩せ我慢の集う「西洋古典叢書」

編集委員・京都大学教授　中務 哲郎

九度山（くどやま）の慈尊院から高野山壇上（だんじょう）へと至る道に沿って180基の町石（ちょういし）が建てられている。五輪塔を戴く背の高い石柱で、信心の篤い人はこれを一つ一つ数えながら登って行くという。敢えて近道は採らず、電車とケーブルも使わないのである。「西洋古典叢書」という営みも信仰の登山に似たところがないでもない。1997年6月に呱々の声を上げた本叢書は第Ⅲ期までに63冊の道標を建て、今第Ⅳ期25冊に向かおうとしている。

本叢書の訳者の多くはギリシア語・ラテン語初学の頃には、明日の演習のために徹夜に近い予習をしながら、これだけの時間に新書の一、二冊も読めばさぞ有意義であろうに、と思わぬ夜とてなかった。そこを我慢して辞書を繰り注釈書と格闘したのである。

版元もいわゆる売れ筋なるものをよく承知していながら、文学部でも昨今最も人気のない西洋文献、その中でもとりわけ敬遠される古典文献学に立脚した作品群を、敢えて叢書として翻訳刊行しようとする。武士の商法としか言いようがない。読者もまた江湖に軽易な出版物の溢れる中で、敢えて寝っ転がっては読めない、噛みごたえのある書物を愛してくださる方々である。叢書をめぐる訳者と版元と読者と、いずれ劣らぬ痩せ我慢の人と称すべきであろう。

最低300頁を読むことを日課にした文芸評論家は尊敬に値するが、本叢書はどの一冊をとってもその速度で読むのは困難であろう。原典の訳を読むというのはそれほど安易ではない、痩せ我慢を要する業である。編集子たちは読者の痩せ我慢に助けられつつ、これまではマイナーな古典の紹介、本邦初訳に力を注いで来たが、第Ⅳ期では些か自縛を解いた。

プルタルコス『英雄伝』が始まる。プラトンでは名作中の名作『饗宴/パイドン』が現れる。『ソクラテス言行録』でクセノポン全集が完結する。『ギリシア教訓叙事詩集』は教訓叙事詩という知られざるジャンルを初めて紹介するし、『テュアナのアポロニオス伝』は、イエス・キリストの福音書に対応するものが異教世界にも存在したことを教えてくれる。ローマ最大の歴史書リウィウスがいよいよ登場する。『古代音楽論集』、テオプラストス『植物誌』、アキレウス・タティオスの新しい訳も見逃せない。

「西洋古典叢書」は180冊では止まらぬ予定、痩せ我慢読者諸氏の渝（かわ）らぬご支援を庶幾（こいねが）うものです。

マンガ制作　オガワツヨシ

2017年11月15日発行 〈非売品〉
2023年12月12日 Lite版発行 〈PDF版〉

一般社団法人
京都大学学術出版会

〒606-8315
京都市左京区吉田近衛町69
京都大学吉田南構内
TEL 075-761-6182
FAX 075-761-6190
URL http://www.kyoto-up.or.jp